

旧約の歴史書 (2)



歴代誌第一、第二、エズラ記 ネヘミヤ記 エステル記

空知太栄光キリスト教会牧師

銘形 秀則

目次

序説	—捕囚、および捕囚からの帰還後の歴史的状況—	1
	1. バビロン捕囚前 —事件はヨシヤ王の死(BC609)から始まった—	
	2. バビロン捕囚とエルサレムの陥落	
	3. バビロン捕囚からの帰還と再建	
歴代誌		
A. 序		7
	1. 歴史書としての歴代誌	
	2. なぜ歴代誌を学ぶのか	
	3. 歴代誌に見る礼拝神学	
	4. 歴代誌の梗概	
B. ダビデの幕屋における礼拝改革		9
	1. ダビデが王となって最初にしたこと	
	2. 「契約の箱」の歴史的経緯	
	3. ダビデが目指した礼拝改革・・ダビデの幕屋における神の臨在の回復	
C. ダビデの幕屋礼拝における特徴		13
	1. 音楽を取り入れた新しい礼拝スタイル	
	2. 歴代誌第一16章にみる礼拝用語の豊かさ	
	3. ダビデの神殿礼拝のヴィジョン	
	4. 歴代誌第一29章に見る礼拝者ダビデの姿	
D. モーセの幕屋とダビデの幕屋の総合としての ソロモン神殿の礼拝神学		19
	1. ダビデの神殿礼拝の具体的構想	
	2. モーセの幕屋の礼拝神学	
	3. ダビデの幕屋の礼拝神学	
	4. ダビデの幕屋とモーセの幕屋の総合としてのソロモン神殿の礼拝神学	
	5. ソロモン神殿における賛美礼拝	
エズラ記 ネヘミヤ記 エステル記	—神の民の再建事業—	22
	1. 三書(エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記)に共通する歴史的背景と思想	
	2. エズラ記の構造と概要	
	3. ネヘミヤ記の構造と概要	
	4. エステル記の概要とプリムの祭りの救済史的意義	
旧約聖書歴史書(2)の結論		31
	1. 歴代誌、エズラ記、ネヘミヤ記の主題は、神の民の再建である	
	2. 神の民とその再建の現実	
	3. 歴史書(2)の神の民の再建事業は失敗	
	4. 律法主義への傾斜と罫	
	5. 神の恵みによって再建事業の待望	

序説

―捕囚前、捕囚、および捕囚からの帰還後の歴史的状況―

1. バビロン捕囚前・・・事件はヨシヤ王の死(BC609)から始まった。

(1) ヨシヤ王の宗教改革

◆ヨシヤ王はユダ王国における最後の宗教改革をなした王であった。ヨシヤ王は、治世第8年に16歳の若さでダビデの模範に従って主を求め始め、第12年には断固として偶像除去を開始した(3)。ヨシヤの主への熱意がこの勇氣ある改革事業を断行させた。それはかつてのヒゼキヤの宗教改革よりも徹底したもので、その中には偶像礼拝者への厳しい処置も含まれていた。その改革は、第18年目には、宮で律法の書が発見された出来事をきっかけに頂点に達した。

(2) その靈的影響と実り・・・三人の預言者、エレミヤ、ダニエル、エゼキエルの輩出

◆このヨシヤ王が治めていた約34年間に、やがてバビロン捕囚前と捕囚期に用いられる旧約聖書における三大預言者―エレミヤ、ダニエル、エゼキエル―が育っていた。エレミヤが召命を受けたのは、ヨシヤ王の改革翌年(BC 627)である。

◆**エレミヤ**はユダのバビロン補修直前に遣わされ、民に悔い改めと従順を説いた。彼の預言場所はエルサレムであり、後に、不従順な民によってエジプトに連れて行かれる。エレミヤが涙の預言者と言われるのは、ヨシヤ王が主の律法を恐れ、悔い改めによって国を一掃したように、悔い改めの涙を持って預言したからである。エレミヤのヨシヤ王による影響は否定できない。

◆そうした主を恐れる姿勢は**ダニエル**にも受け継がれた。ダニエルは、ヨシヤ王の時代にユダの貴族の息子として生まれ育った。「王族が貴族」(ダニ1章3節)の家系として、両親と共に、ヨシヤ王との個人的な交わりを持った可能性は十分考えられる。先輩ヨシヤの主への情熱、実行力に触れることで、若いダニエルは純粋な信仰を燃え立たされ、義のために立ち上がるという改革者的精神を学んだに違いない。後に、バビロン帝国の王たちの前でダニエルが取った毅然とした信仰姿勢は、ヨシヤ王の改革精神に類似するものがある。

◆ダニエルはユダの王エホヤキムの治世第3年にバビロン捕囚として連れて行かれた(ダニエル1章1節)。その後、一生涯、彼はバビロンの地で過ごした。

◆もうひとりの預言者、**エゼキエル**はダニエルの数年後、捕囚の民と共にバビロンに連れて行かれた。ダニエルはバビロンの王宮で仕えたが、エゼキエルはケバル川の捕囚の民の間で仕えた。彼はダニエルとも親交があったようである。

(3) ヨシヤ王の不慮の死

◆ヨシヤ王が女預言者フルダに神のみこころを求めたとき、彼女の託宣はこうであった。「エルサレムに神の怒りが注がれるのは避けがたいことであるが、ヨシヤの謙虚な態度の故に、破局はヨシヤの時代には臨まない」と。(2歴代誌34:23～28)

◆しかし事件はヨシヤの出兵から始まった。当時のアッシリヤは力が衰え、新興してきたバビロニアがこれを西北方へ押しやっていた。アッシリヤ王とその軍隊はバビロニア軍に追われ、ユーフラテス川上流のカルケミシュまで追い詰められた。このアッシリヤへの援軍を率い(エジプトの王ネコ)が北上するという情勢の中で、それを阻止するためにヨシヤは軍を率いて(メギドの平地)でエジプト軍に戦いを挑んだ。ネコは「ユダを攻めるのではないから、軍を引け」と忠告したが、ヨシヤは聞き入れず、この戦いで彼は戦死した。BC 609年、ヨシヤの死を全国民は悲しみ、エレミヤは彼のために哀歌を作った。

◆ヨシヤの死は、後の時代の背教と南王国滅亡という事態へと一坂道を転げ落ちるように、だれもとどめることのできない事態へと一急転する引き金となっていく。

2. バビロン捕囚とエルサレム陥落

第一次捕囚・・BC 605

◆バビロニア帝国による最初の捕囚は、ユダのエホヤキム王の第3年(前605年)に始まった(ダニ1章1節、II歴代誌36章)。ユダはバビロンの属国となった。このとき、ダニエルら有能な少数の者たちが捕囚の身となった。しかし3年後にエジプトの援助によってユダは独立を取り戻した(かに見えた)。そして反逆から3年後、ネブカデネザルの軍がエルサレムへ攻めてきた。

第二次捕囚・・BC 597 (これを第一次捕囚とする者も多い)

◆エホヤキムの死後、エホヤキンが王位につくが、わずか三ヶ月でバビロンの王ネブカデネザルとその軍隊がエルサレムを包囲攻撃にあい、エホヤキンは降伏する(II列王記24章12～17節、エレミヤ27章16節)。ユダ王国の上層階級一王エホヤキンを始め、その家族、軍人、職人等の1万人がバビロンの地に連れ去られ、神殿と王宮の財産のすべてが奪われた。この出来事を第一次バビロン捕囚と言う者が多い。ネブカデネザル王はエホヤキンに代わってゼデキヤをユダの王とした(11年間)。この間に預言者エレミヤが活躍する。ゼデキヤ即位の二年後当たり(BC595)に、バビロンで反乱が生じ、捕囚の民の中から偽預言者が起こって、バビロンの滅亡が近いと同胞をあり、逮捕され、処刑されるという事件が起こった。その知らせを聞いたエレミヤはバビロンにいる同胞に手紙を送り、偽預言者の煽動に乗らないように警告し、むしろバビロンのために平安を祈ることを勧める。なぜなら、主による解放と回復の時は、「70年」が満ちてから来るから、平静に待望せよと警告した。^{脚注1} エレミヤ書29章にそのいきさつは詳しく記されている。このようなエレミヤの言動は、ゼデキヤ王の下にいた熱狂的な親エジプト派の憎しみを買うこととなった。

第三次捕囚・・BC 586 (これがバビロン捕囚の代表的な出来事である)

◆預言者エレミヤの警告は、バビロンのくびきを従順に負うこと、決して反抗してはならない、というものであった。しかしその警告は無視されるかたちとなった。ゼデキヤ王はバビロンに反抗したため、捕らえられ、彼の子どもたちは彼の前で殺され、彼自身も両眼をえぐり取られ、鎖につながれたままバビロンへ連れて行かれた。エルサレムは陥落し、神殿は火で焼かれ、周囲の城壁はことごとく破壊された。老若男女を問わず多くの者が虐殺された。貧民を除く、すべての者たちがことごとくバビロン捕囚の憂き目に会ったのである(II列王記24章8～17節、エレミヤ52章17～23節)

第四次捕囚・・BC 583

◆エレミヤ書52章30節参照。捕囚人数は少ないが、おそらくこれは正式な兵士の数と考えられる。

脚注1 ◆エレミヤの70年の解釈として、いろいろな考え方がある。最初の捕囚をBC605とし、捕囚からの帰還をBC536とすれば、およそ70年になる。別の解釈によると、BC586年のエルサレム崩壊とBC515年の第2神殿の完成の間の年数であると言う。しかしここでは、あまり数学的正確さにとらわれなくてもよい。70という数は聖書では象徴的意味を持っており、概数と考えることができる。

3. バビロン捕囚からの帰還と再建

バビロンの陥落・・・BC 539

◆クロスはバビロニア帝国を倒してペルシヤ帝国を揺ぎない世界帝国にした。クロスは、それまでの覇者のような民族の強制移住による反乱の防止、人材の登用という占領政策を廃して、むしろ捕囚になっていた諸民族を帰国させ、それぞれの宗教を尊重することによって、国の平穩を図る政策を採用した。クロスは、ユダヤ人に対して神殿の再建を許可し、ネブカデネザルによって奪われていた神殿の宝物も返還するよう命じた。さらには、神殿再建に対して経済的な援助も約束したのである。

第一次帰還・・・BC 538

◆BC 538年のクロスの勅令により、最初の帰還の指導者として、ユダ王家の末裔であるシェシユバツアル(ゼルバベル)が任命され、第一回目の帰還がなされた。この時に帰還したのは4万2千人ほどであった。さっそく神殿再建工事が着手された。ところがさまざまな妨害にあって、基礎工事で頓挫、以後18年間、再建工事は中止された。妨害したのは、捕囚期にこの地に住みついて既得権を主張する雑種民であった。このあたりの関係は、現代のイスラエルとパレスチナの問題にそっくりである。

神殿工事再開・・・BC 520

◆神は預言者ハガイ、ゼカリヤを遣わし、総督ゼルバベルと大祭司ヨシユア、ならびに民たちの心を奮い立たせた(ハガイ1章14節)。その結果、工事が再開された>

神殿完成・・・BC 515

◆5年の歳月をかけて神殿が完成する。これが第二神殿である。

ユダヤ人存亡の危機・・・BC 479

◆第一次エルサレムの帰還者はごく一部であり、大部分はペルシヤにそのまま残留した。彼らは外国での生活に慣れ、生活も安定し、いまさら故国に帰りたいたいと願わなかった。

◆ペルシヤの王アハシェエロスの治世にエステルが王妃となる。王の寵臣ハマンはユダヤ人虐殺計画を謀るが、エステルはハマンの計画を未遂に終わらせることに成功する。ユダヤ人のいのちと財産は守られたのである。

第二次帰還・・・BC 458

◆ペルシヤ王アルタシヤスタの支援により、祭司であり律法学者であるエズラの率いる小規模集団がエルサレムに帰還する。^{脚注2}エズラにより礼拝復興に向けた神の民再建の教育が始まる。

脚注2 ◆ただし、エズラとネヘミヤの2人がエルサレムに帰還した時代に関しては異説がある。この時代は暗黒時代であり、資料も欠如している時代である。伝統的な解釈、聖書に記されている順序によれば、エズラがエルサレムに来たのはアルタクセルクセス1世の第7年(前458年、エズ7:7)で、ネヘミヤは同じ王の20年にエルサレムに到着した(前445年、ネヘ2:1)。ところが別の説では、ネヘミヤの帰還は上記と同じであるが、エズラはアルタクセルクセス2世の第7年(前398年)に帰国したと言う。更に別の見解では、本文を読み換えて、エズラの帰還はネヘミヤの◆帰還と同じ王アルタクセルクセス1世の時代であるが、第7年ではなく、第27年あるいは第37年であったとする。これらの見解ではネヘミヤが先にエルサレムに到着し、しばらく経ってからエズラがやって来たとする。1960年代まで有力であったネヘミヤ→エズラという見解も、最近ではむしろ伝統的なエズラ→ネヘミヤの順序を支持する立場が強まっている(U・ケラーマン)。大切なことは、彼らが何をしようとしたか、である。

エルサレム城壁再建・・BC 445

◆アルタシャスタ王の献酌官であったネヘミヤは、王の支援によりエルサレムに帰還し、崩れたままの城壁を再建する。その工事は周到な準備によって52日間で完成した。ネヘミヤは445年～433年までの12年間、エルサレムの総督としてその任に当たった。

歴代誌の執筆・・BC 440

◆確定的ではないが、エズラあるいはその関係者により歴代誌が書かれた可能性は大きい。その執筆意図は、もう一度歴史を新たに見直し、神の民イスラエルに与えられた神の使命を確認し、ダビデ、ソロモンの偉業を思い起こさせて、礼拝の民としてのアイデンティティを再認識させる必要があった。

〔付録 ①〕

聖書の世界



アッシリヤ人

◆アッシリヤ帝国は、王国分裂の時代に強大な勢力を持った。イスラエルの民を捕囚として連れ去った。

バビロニヤ人

◆バビロニヤ帝国は、アッシリヤ帝国の後に続いた。ユダの民を捕囚として連れ去った。

ペリシテ人

◆元来はエーゲ海に住んでいた人々で、出エジプトからカナン征服のころに、この地域に定住した。士師の時代にイスラエルを圧迫し、サウルやダビデと戦いを交えた。

エジプト人

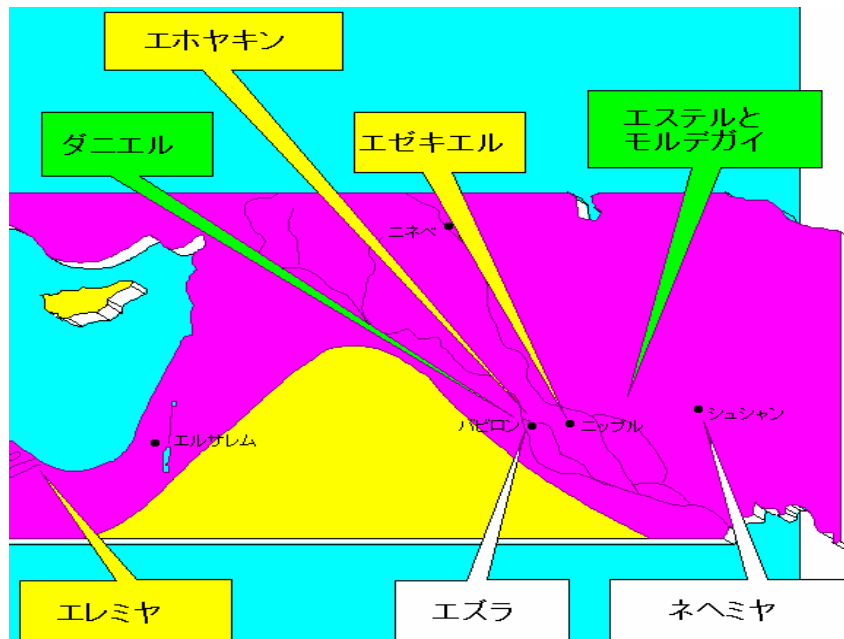
◆次第に衰退はしたものの、旧約聖書の時代のイスラエルに大きな影響を与えた南方の勢力。

メディヤ人とペルシヤ(パルテヤ)人

◆バビロニア帝国から支配権を奪い取った。ペルシヤ人は、捕囚の民を解放し、祖国に帰還させた。

〔付録 ②〕

捕囚の時代の人々



- | | | | |
|--------------------------------------|-------|------|-------|
| <input type="checkbox"/> 捕囚初期における記述 | エズラ | ネヘミヤ | |
| <input type="checkbox"/> 捕囚期間中における記述 | ダニエル | エステル | モルデカイ |
| <input type="checkbox"/> 捕囚終了期における記述 | エホヤキン | エレミヤ | エゼキエル |

エホヤキン

◆3か月間王として治めた後に、18歳でエルサレムから捕囚にされた。37年後エビル・メロダクがバビロンの王となった年に、彼は牢獄から釈放され、王の前で食事をする特別待遇を受けた。生害、王の庇護の下で暮らした。ユダヤの捕囚の民からは重要な人物と見なされた。(2列王記24:1-15, 25:27-30)

ダニエル

◆エホヤキン王とともに捕囚にされた。バビロンの王宮に仕えるために訓練される者のうち選ばれた。ダニエルは、王の第1の助言者になるまでに昇進した。捕囚期間中に、彼は帝国の全知事を管轄する身分になった。言伝えによると、捕囚の時が終わった後に、彼はエルサレムに戻ったとされている。

エゼキエル

◆エホヤキン王とともに捕囚にされた。彼は、エルサレムは破壊されるが、後に捕囚の民はエルサレムに帰還し、神殿を再建する、と預言した。捕囚期が終る前に死んだと思われる。

エステルとモルデカイ

◆エホヤキン王とともに捕囚にされた。エステルは、ネヘミヤがエルサレムに帰る少し前に、ペルシア皇帝アハシユエロスの王妃になった。親戚のモルデカイとともに、彼女はペルシア帝国全土におけるユダヤ人迫害を阻止した。モルデカイは、アハシユエロスの王宮で有力な人物になった。

エレミヤ

◆ユダの捕囚期の始めに、ユダの最後の王ゼデキヤの将校とその部下たちがバビロニアが任命したユダの総督ゲダルヤを暗殺する。そしてエジプトに逃れる1団によってエレミヤは誘拐される。(2列王記25:22～26) エレミヤは残りの生涯をエジプトで過ごした。(エレミヤ43章)

エズラ

◆ペルシア帝国の高官であり、ユダヤ人担当者であった。皇帝アルタシャスタ1世は、ユダヤの律法に従って民のあり方を改革するために、彼をエルサレムに遣わした。彼は、第2の捕囚の民を率いて帰国した。(エズラ7章)

ネヘミヤ

◆アルタシャスタ1世の献酌官ネヘミヤは、紀元前445年、城壁を再建するために、皇帝によってエルサレムに送られた。彼は、第3の捕囚の民を率いて帰国した。(ネヘミヤ1章、2章)

普通の人々

◆捕囚の地であって、多くのユダヤ人は裕福になった(エズラ2:68, 69参照)。彼らはバビロンのユダヤ人居留地や他の場所に集って住んだ。しかし、裕福であるにもかかわらず、土地と先祖からの相続財産を失って、彼らは絶望していた。詩篇137篇は、その彼らの心情を表している。

歴代誌

A. 歴代誌序説

1. 歴史書としての歴代誌

(1) 歴史とは何か

① 過去の総体としての歴史

② 書かれた史書としての歴史 ⇒(①≠②)

◆過去の総体としての歴史は、人間の理解を絶した無である。書かれた史書としての歴史書は、その総体の中から選択され、意味づけられたものである。その選択の基準となる視点が歴史観である。それゆえ歴史書はすべてある視点から、ある目的に従って書かれたものと言える。

(2) 歴史書としての歴代誌

① 歴代誌は、同じく歴史書であるサムエル記、および列王記に記されている歴史的事実と重複する部分が多いが、事実の選択はそれぞれ異なった視点から解釈され、また省略されている。

② 歴代誌の歴史観とは、礼拝の民として選ばれた神の民が、再建を図るに当たって、礼拝こそイスラエルの中心であるという視点である。この視点から歴史化が見直され、編纂されたものが歴代誌である。そしてイスラエルの理想的な礼拝者の典型ともいうべきダビデに多くの紙面が割かれ、ダビデに与えられた賛美礼拝とそのヴィジョンが強調されている。なぜなら、ダビデこそ「神の王国」としてのイスラエルにおける「真の礼拝者」のモデルだからである。

③ イスラエル歴代の王たちは、このダビデの道を行んだかどうかで評価されている。

2. なぜ歴代誌を学ぶのか

(1) その主題の重要性のゆえに

① 歴代誌全体の主題は、「礼拝の民イスラエルの再建」である。神を礼拝することこそイスラエルの民の中核であることが強調されている。これはイスラエルの民が偶像礼拝によって捕囚という痛みと辱めを伴う歴史を通して学んだ教訓であり、回復への道筋であった。

② 礼拝という主題は歴代誌のみならず、創世記の最初からヨハネの黙示録の終わりまで、聖書全体を貫く主題である。神の救いの究極的目的地は、人を真の礼拝者とすることである。ヨハネの黙示録においては、すべての種族、国民、民族、そしてすべての被造物が御座の前で、昼も夜も絶えることなく神を礼拝している姿が啓示されている。

(2) 礼拝の今日的課題—「果たして、礼拝を正しく理解し真の礼拝者として生きているのか—

① E・W・トウザーの警鐘・・・『霊とまことをもって』(いのちのことば社、1990年)

「現代の福音主義では礼拝という輝く宝石を失っている。現代の教会は礼拝する能力を失っている。」(1960年代)

- ② いつの時代でも、どこにおいても、神は真の礼拝者(礼拝ではなく礼拝者)を求めておられる。ヨハネの福音書4章19節～26節でイエスはサマリヤの女に真の礼拝について啓示された。
 - a. 「霊とまことによって」・聖霊と真心から(自発的)ささげられる礼拝。もはや律法的、命令的ではなく、恵みと感謝の応答としての礼拝。その本質は「守る」「受ける」礼拝ではなく、「ささげる」礼拝である。
 - b. 「サマリヤでも、エルサレムでもない」・旧約時代においては礼拝の場所が強調された。しかし新約時代においては、礼拝の場所は一定の見える神殿から、聖霊の宮としての私たちのからだに移行する。
- ③ 礼拝の優先性の確立
礼拝は宣教、教育(弟子訓練)、交わり、奉仕においての土台である。
 - a. マタイ4章10節・サタンに対する主の答え
 - b. ルカ10章42節のマリアの選択
 - c. 詩篇27篇4節のダビデの「ただ一つの願い」
 - d. 使徒の働き13章のアンテオケ教会における世界宣教の幻

3. 歴代誌に見る礼拝神学

(1) 執筆の歴史的背景

- ① 歴代誌は、バビロン捕囚からの解放後、「残りの者」(レムナント)がエルサレムに帰還した後に書かれた。帰還した民は希望に燃えて、故国エルサレムの再建に乗り出したが、近隣諸国(特にサマリヤ)の圧迫や異教徒との雑婚、神殿の再建と神殿礼拝に対する無関心、生活苦等の多くの問題に直面し、次第にその希望は薄れてきた。人々は神への礼拝よりも、自分の生活を優先するようになっていった。
- ② 神が預言者ハガイやゼカリヤを通して、ゼルバベルや大祭司ヨシュア、そして民を奮い立たせたことにより、神殿は再建されるが、それはあくまでも大国の支援のもとになされたものであった。それゆえに、神の民の信仰は次第に生ぬるいものとなっていった。

(2) 執筆の目的

- ① そのような状況におかれたイスラエルの民に対して再度、礼拝の民としてのアイデンティティを確立させるため。
- ② 契約の箱をシオンに安置し(ダビデの幕屋)、神殿建設を準備したダビデと、それを建設したソロモンの偉業を想起させ、礼拝の重要性を再認識させるため。
- ③ 礼拝を尊び、神に従った王は祝福を受け、偶像礼拝に陥った王は災いを受けたことを想起させ、警告を与えるため。特に、南ユダ王国の歴代の敬虔な王たちが強調されている。アサ、ヨシャパテ、ヒゼキヤ、ヨシヤらは他の王に比べて多くの紙面が割かれている。また、マナセのように、悔い改めた王に対する神の恵み深い赦しをも強調している。そのことを記すⅡ歴代誌33章は列王記に記されていない。

(3) 歴代誌全体の中心メッセージ

- ◆礼拝されるべきお方こそ国の中心である。ダビデとソロモンはイスラエルの歴史におい

て70年におよぶ黄金時代を築いたが、その二人の王が即位して、まず手をつけたことはいずれも神を礼拝したことであった。(I歴代誌13章1節～5節、15、16章、II歴代誌1章1～6節)

(4) レビ人の存在と役割

- ① 神殿礼拝の奉仕のためのレビ人の存在が注目される。彼らは賛美をもって主を礼拝し、聖歌隊、門衛としての役割を務め、祭司の補助者として、神殿礼拝に必要な様々な面において奉仕した。また、預言者のように預言したりもした(I歴代25章1～3節)。礼拝のために並々ならぬレビ人たち(量、質、共に)が起用されている。
- ② 祭司もレビ人も系図としては同じルーツを持っているが、歴代誌においては、祭司は区別して扱われ、むしろ目立たない存在となっている。

4. 歴代誌の梗概

I歴 1章～9章	I歴 10章～29章	II歴 1章～9章	I歴 10章～36章
礼拝の民としての系図	ダビデの治世 (ダビデの幕屋と臨在)	ソロモンの治世 (神殿建設とその栄光)	歴代の王たちと その評価

B. ダビデの幕屋における礼拝改革

1. ダビデが王となって最初にしたこと

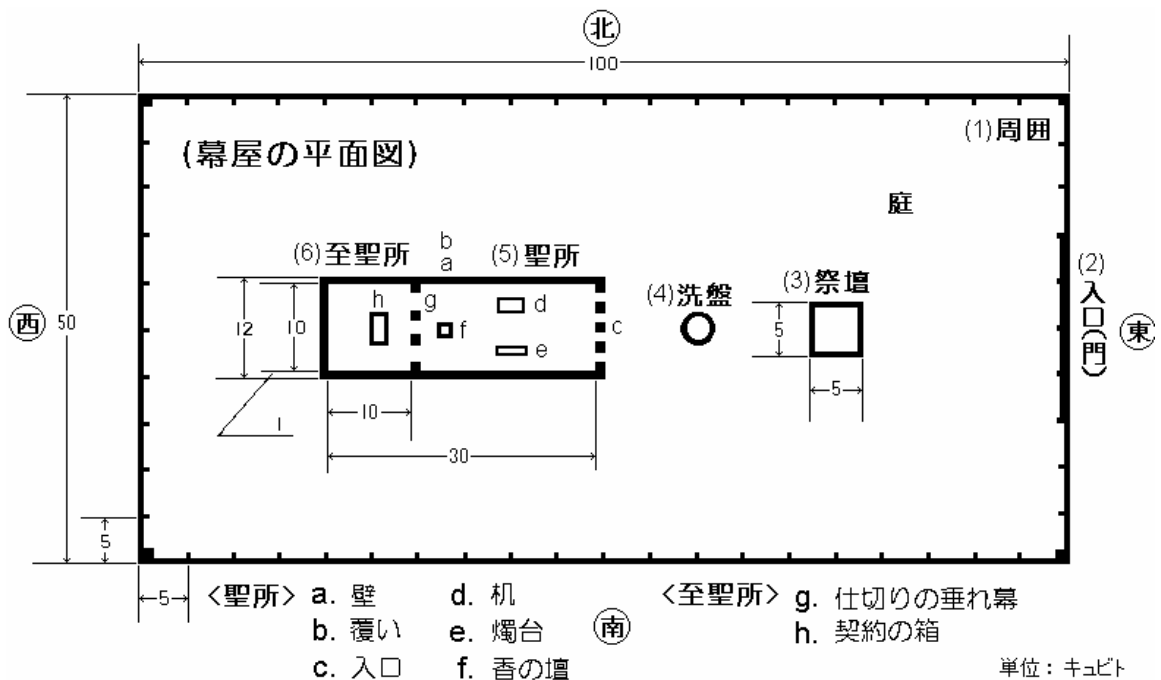
(1) 「契約の箱」をエルサレムへ!!(I歴代13章)

- ① ダビデが王となったことは、まず第一に、エルサレムを攻略してシオンの要害を攻め取り、そこを全イスラエルの首都としたことである。その首都はダビデの町とも呼ばれた(I歴代11章1～5節)。そこは全イスラエルの政治的、宗教的な中心地となった。
- ② ダビデが王となったことの第二は、長い間失われていた神の「契約の箱」をエルサレムに移転しようとしたことである。これは神の直接的な指示ではなかったが、その思いを神はダビデの心に入れていた。しかしそれは民との合意によって決行する。
- ③ ダビデの発案・「私たちの神の箱を私たちのもとに持ち帰ろう。サウル時代には、これを顧みなかったから」(13章3節)。注¹

注¹ この箇所は並行記事(IIサムエル6章1～11節)とほぼ同じであるが、歴代誌は1～4節を加えて記者の意図を明確にしている。つまりサウル時代には神の箱を「顧みなかった」。その怠慢を全イスラエルの責任として反省し、悔い改めと事態の改善を王の提議として全イスラエルに計り、その賛同を得たことで、神の民のリーダーとしてのダビデの適格性をサウル王との対比において描き出している。良きリーダーのもと、民は今や以前とは一変して、神を尋ね求める者(真の礼拝者)となる道が備えられたのである。また正しい礼拝を確立するために、神の臨在の象徴である神の契約の箱と共に、専任の礼拝奉仕者である祭司やレビ人が各町々からエルサレムへ集結させることが提案された。

(2) 「契約の箱」の理解

◆ダビデが目指した礼拝改革を知る上で、「契約の箱」についての確かな理解をもつことは重要である。なぜなら、「契約の箱」は〈モーセの幕屋〉、〈ダビデの幕屋〉、およびソロモンの神殿に共通する〈神の臨在〉の象徴であり、その箱が置かれた〔至聖所〕は神のご自身の顕現とその御旨が啓示される「会見の場所」であったからである。至聖所には、年に一度、大祭司のみが入り、贖いの蓋に血を塗り、イスラエルの民全体のための贖いをした。モーセだけは（後にモーセの後継者ヨシユアも）出入り自由であった。モーセの幕屋礼拝の中心は、至聖所にある「契約の箱」であった。その中には、十戒の刻まれた石の板、マナの入った金のつぼ、そして芽を出したアロンの杖である。



2. 「契約の箱」の歴史的経緯

(1) 神の臨在の顕現時代（荒野～ギルガル～シロ）

①〔40年間の荒野〕

◆幕屋が荒野で宿営するときは、常に民たちの中心にあった。また民たちが主の命令で旅立つ時は、「契約の箱」は常に先頭であった。（民数記10章33～34節/35～36節には「契約の箱」行軍の歌が見られる。）

②〔ヨルダン渡渉〕

◆ヨルダン川ヲ渡るときに、祭司たちは「契約の箱」を担いで先頭を進んだ。祭司たちの足が水際に浸ったとき、ヨルダン川は完全にせき止められた(ヨシユア記3章)。

③〔ギルガル〕

◆ギルガルは約束の地カナン占領のための戦いの本陣となった。なぜならそこに「契約の箱」が置かれたからである。民たちは戦いのたびごとにギルガルに戻った。

④〔シロ〕

◆ヨシユアはカナンの地をほぼ占領した後、「契約の箱」をシロに安置した(世シユア18

章1節)。シロは占領地のほぼ中央に位置した。一時ベテルに運ばれたことがあったが(士師記20章27節)、サムエルの時代までシロに安置されていた。サムエルの父エルカナは毎年礼拝のためにシロに上った(1サムエル1章3節)と記されている。

(2) 神の臨在の喪失時代

(シロ～エベン・エゼル～アシュドテ～ガテ～エクロン～ベテ・シュメシユ)

① [契約の箱の剥奪]

◆ところが、神の民にとって最も重要な「契約の箱」が敵に奪われるという事態が起こった。ペリシテの戦いの時、契約の箱がエベン・エゼルの戦場に持ち出された。しかしイスラエルは打ち負かされ、契約の箱はペリシテ人に奪われてしまったのである。その結果、「イ・カボデ」(神の栄光は去った)のである。^{注2}

◆その背景には、大祭司エリとその子どもたち(ホフニとピネハス)に見られるように、祭司社会の墮落があった。当然の結果として「主のことばはまれにしかなく、幻も示されない」(1サムエル3章1節)という神の臨在喪失の時代を迎える。ただ預言者サムエルにだけは、主はご自身のことばをもって現わされた。この時代にイスラエルの民は、他の国と同じように人間の王を求め、はじめてイスラエルに王制が導入されることになる。最初の王としてサウルが立てられたがその礼拝態度はきわめてお粗末だった。⇒(1歴代10章13～14節のサウルと14章10節、14節のダビデを比較)

② [ペリシテ領内での7ヶ月]

◆契約の箱はペリシテ人に奪われたが、ペリシテ人はこの箱のために疫病に悩まされ、多くの者が打たれた。そこでペリシテ人は、その箱をアシュドテ、ガテ、エクロンへとたらい回しにし、結局、神の箱は贈り物をつけられてイスラエルに送り返された。契約の箱がペリシテ領内にあったのは7ヶ月であった。

③ [20年間の期間]

◆契約の箱をダビデがエルサレムの天幕に運び移すまで、実に20年間、キルヤテ・エアリムのアビナダブの家に安置され、その息子エルアザルがその箱を守った。

(3) 神の臨在の回復時代 (キルアテ・エアリム～オベデ・エドム～エルサレムのシオン)

① [エルサレム遷都]

◆ダビデはイスラエルの過去の歴史に全く関わりのなかったエルサレムを宗教的、政治的な中心地とし、そこに神の「契約の箱」を移転しようと考えた。それによって、神の臨在と力を再びイスラエルにもたらすためであった。しかもそのことを独断ではなく、合意の上で決行することによって、国家的に霊的一致をもたらす狙いがあったと考えられる。しかしながら、意図と目的は良かったが、その方法がまずかった。

② [一回目の移転]・・・ウザの割り込みによって中断(1歴代13章)。ここでの教訓は何か。

③ [二回目の移転]・・・神の定められた方法と秩序によって、再度の挑戦

a. レビ人が、契約の箱を担ぐことが定まっていた(同、15章2節)。

b. レビ人たちは(祭司たちも)、自分自身を聖別しなければならなかった。^{注3}

注2 神の臨在が失われるとき、具体的にどのようなことが起こるのか。①礼拝が宗教儀式となり、伝統的習慣が支配する。御霊の生きた自由さと動きを見ることができなくなる。②人間が作り出した礼拝形式にこだわる。③エリの首が折られたように、かしらなるキリストとからだなる私たちとのライフラインが断ち切られる。④現状維持、現状肯定に安んじる、霊的渴望への希求は見られない。⑤神のみことばをあるがままに受け入れようとはしない。真理が人間の経験によって解釈される。⑥有名人指向に走る・・・等。黙示録のラオデキヤ教会、テアテラの教会を参照。

注3 祭司職の聖別については、出エジプト記29章にある。

3. ダビデが目指した礼拝改革・ダビデの幕屋における神の臨在の回復

(1) ダビデの幕屋における礼拝の改革

① 〈全く新しい形態の礼拝〉

a. 契約の箱をだれも見ることができた

◆モーセの幕屋は大庭、聖所、至聖所とから成っていたが、ダビデの幕屋においては、聖所はなく、至聖所だけをシオンの山に移転させた。モーセの幕屋では、聖所に入る者は祭司に限られていた。至聖所に至っては大祭司のみ(他にモーセ)垂れ幕を通して入ることが許されたが、ダビデの幕屋では、垂れ幕はなく「立ち入り禁止」の看板もない。祭司もレビ人も民もみな契約の箱を見ることができた。これは主を礼拝する上で革命的なことであった。

b. 賛美中心のいけにえがささげられた。

c. 新しいいけにえ(ささげのもの)

- 義のいけにえ(詩篇 4 篇 5 節) ● 喜びのいけにえ(詩篇 2 7 篇 6 節)
- 従順のいけにえ(詩篇 4 0 篇 6 節) ● 感謝のいけにえ(詩篇 5 0 篇 1 4 節、2 3 節)
- 砕かれた魂(悔いた心)のいけにえ(詩篇 5 1 篇 1 7 節、1 9 節)

d. 聖書ではじめて「ハレルヤ」と賛美させたダビデ

◆ダビデは「レビ人の中のある者たちを、主の箱の前で仕えさせ、イスラエルの神、主を覚えて感謝し、ほめたたえる(ハレルヤ)ようにした」(I 歴代 1 6 章 4 節)とある。ハレルヤは新約時代においては常套句。黙示録の天上の礼拝では、永遠に「ハレルヤ」と賛美する。

② 〈定めた場所(シオン)への安置〉

「彼は、ダビデの町(シオン)に・神の箱のために場所を定め、・・天幕を張った」
(I 歴代 1 5 章 1 節)

a. シオンの地理的意味

◆シオンとは要害という意味。エルサレムそれ自体が難攻不落の堅固な要塞の町。東には険しい峡谷、南と西には外敵に対する砦が築かれていた。シオンは小高い丘であり、エルサレムの南西に位置している。そこにダビデは契約の箱を安置するテントを設置した。

b. シオンの霊的意義

◆聖書では他の山々にまさってシオンの山が特筆される。その理由はただ、そこにダビデの幕屋が置かれ、賛美による礼拝を通して神の臨在がそこに満ちていたからである。

- シオンは神が選び(愛された)場所 (詩篇 1 3 2 篇 1 3 節)
- 神はシオンの中に住まわれた (詩篇 9 篇 1 1 節)
- シオンは美しい所、全地の喜びの場所 (詩篇 4 8 篇 2、11 節、5 0 篇 2 節)

(2) 賛美礼拝に祭司とレビ人たちの登用

◆モーセの幕屋においては、祭司たちやレビ人たちは動物によるささげものに関わっていた。また幕屋の各部の管理責任を担っていたが、ダビデの時代においては、彼らに賛美のための楽器をもたせ、歌をもって、しかも喜びをもって歌わせた。^{注4} 彼らは毎日の日課とし

注4 レビ人の職務内容は、門衛として毎朝、門を開き、礼拝に使用する麦粉やぶどう酒、乳香、香料等の諸材料の購入と保管、また礼拝用の什器の保管、後の神殿では各部屋や倉庫の管理という仕事があった。また後には、つまり歴代誌執筆当時には、賛美に携わる者たちはそのことのみ専門に行なうために、他の職責から自由にされていたようである。

て朝ごとに、夕ごとに、絶えず主をほめたたえた。(1歴代16章40～41節)

(3) 賛美礼拝の指導者たちの存在

- ① 三大賛美リーダーたち・・・アサフ、ヘマン、エタン(エドトン)の三人である。彼らはそれぞれレビ族の中の代表となっている。
 - a. アサフ・・・ゲルシオン族出身(ダビデの幕屋、後のソロモン神殿の賛美リーダー)
 - b. ヘマン・・・ケハテ族出身(ギブオンにあったモーセの幕屋の賛美リーダー)
 - c. エタン・・・メラリ族出身(ギブオンにあったモーセの幕屋の賛美リーダー)
- ② 賛美リーダーはいずれも青銅のシンバルを用いて歌っている。

(4) 祭司たちの役割と配属

- ① 祭司ベレヤとヤハジエルとは、アサフとその兄弟とともにダビデの幕屋で賛美のいけにえをささげた。
- ② 祭司ツアドクとその兄弟たちは、ギブオンのモーセの幕屋で賛美と動物のいけにえをささげた。

C. ダビデの幕屋における賛美の特徴

1. 音楽(楽器)を取り入れた新しい礼拝

◆イスラエルの歴史の中で、音楽を伴う賛美を全盛期に至らせたのはダビデである。ダビデがイスラエル統一王国の王となってから、最初にしたことは、イスラエルが唯一の礼拝の民として確立させるために、サタンから「音楽奪還作戦」を開始したことである。音楽はそれまで戦いのために、あるいは戦勝の祝い(勝利の凱旋)のために用いられた。しかしダビデは、神を礼拝するために、初めて音楽(歌、および様々な楽器)を用いたのである。

- ① **【音楽の聖書的起源】** ヨブ記38章4～7節参照。
 - a. 神の創造を見た天使たち、明けの星々は神の「創造のみわざ」を賛美している。この主題はヨハネの黙示録の天上における礼拝においても顕著である。黙示録4章。
 - b. 音楽は天使のみならず人間にも与えられた。創世記4章20～22節には、文明形成のための基礎的な三つの仕事が記されている。第一に、家畜を飼う仕事。第二に、文明の利器を作る鍛冶屋。そして第三に、楽器を奏する音楽家が登場している。
- ② **【天上の賛美指導者ルシファーの墮落】**
エゼキエル28章12～17節、イザヤ14章12～15節。
 - a. 音楽の本来の目的は、神をほめたたえるためであった。しかし天上の賛美指導者であったルシファーが高ぶったことにより、音楽は本来の目的から逸脱してしまった。
 - b. 本来、神の栄光を現わすために作られた音楽は、人間を賞賛するために用いられるようになった。偶像礼拝、祭りには音楽はつきものである。
- ③ **【音楽の持つ効用】**
 - a. 音楽そのものが持っている力の大きさは計り知れない。国家、軍歌、イーギー・リスニング(ストレス解消のための情緒安定のための)、音楽療法(1サムエル16章23節

参照)^{注1}

- b. サタンは音楽の持つ力をよく知っており、それを悪用する。
 ハード・ロックの危険性について(参考書 ピーター・ルシェン・ベラント 著「WHAT'S WRONG IN ROCK AND ROLL?」(1992,邦訳「ロックンロールの何が良くないのか」)・・・この本には、ハード・ロックのテーマやメッセージが絶望、セックス、暴力、悪魔礼拝、オカルト崇拝であり、その結果、ドラッグやアルコールの乱用と結びついて、多くの若者たちを自殺へと導いていることを警鐘している。自殺でこの世を去ったロックスターたちの名前が羅列されている。

④ [主をたたえるための楽器の製作]

- a. 詩篇150篇を見ると、角笛、十弦の琴、立琴、緒琴、笛、青銅のシンバル、ラッパなどの楽器で神をほめたたえるべきことを命じている。これは現代の楽器でいえば、弦楽器、木管楽器、打楽器である。
- b. 教会史を見ると、初代教会時代もカトリック時代も、礼拝において楽器は用いられず、長い間声楽中心であった。プロテスタント教会はオルガンのみを神を賛美する楽器として認め、その他の楽器はサタンに属するものと考えられてきた。しかし今、教会はダビデが目指した礼拝、特に、詩篇に目を留めるようになり、文字通り、あらゆる楽器を通して賛美するようになってきている。

(1) 喜びにあふれた賛美

- Ⅰ 歴代誌15章16節 「ここに、ダビデはレビ人のつかさたちに、彼らの同族の者たちを十弦の琴、立琴、シンバルなどの楽器を使う歌うたいとして立て、喜びの声を上げて歌わせるよう命じた。」
- 同 上15章25節「こうして、ダビデとイスラエルの長老たち、千人隊の長たちは行って、喜びをもって主の契約の箱をオベデ・エドムの家から運び上ろうとした。」
- 同 上15章28節「全イスラエルは、歓声をあげ、角笛、ラッパ、シンバルを鳴らし、十弦の琴と立琴とを響かせて、主の契約の箱を運び上った。」
- 同 上15章29節「こうして、主の契約の箱はダビデの町にはいった。サウルの娘ミカルは、窓から見おろし、ダビデ王がとびはねて喜び踊っているのを見て、心の中で彼をさげすんだ。」

- ① ダビデの幕屋の礼拝の基調は爆発的な喜びである。
- ② 詩篇には「神に向かって喜び叫べ」と7回も命じられている。
 ⇒66篇1節、81篇1節、95編1～2節、98篇4節、6節、100篇1節。
- ③ モーセの幕屋ではきわめて静粛な礼拝であったが、ダビデの幕屋では長い間、神の臨在と力を待ち望んでいた人々が大声で神をたたえて礼拝するようになった。

(2) 終わることのない、継続的な賛美(24時間賛美)

- Ⅰ 歴代誌16章6節「祭司ベナヤとヤハジエルは、ラッパを携え、常に神の契約の前にいた。」
- 同 上16章37節「彼は、その場所、すなわち、主の契約の箱の前に、アサフとその兄弟たちを

注1 ◆『癒しとしてのグレゴリオ聖歌』(キャサリン・ル・メ著、1995年)に次のようなことが掲載されている。
 「1960年代の初期、第二ヴァチカン公会議で、日々の礼拝でグレゴリオ聖歌の歌唱を続行すべきかどうか、もっと実質的な活動を優先させ、聖歌を聖務日課からははずすかどうかを検討され、はずすことで決着がついた。ところがほとんどなくして修道院に変化が起き始めた。それまで一日3～4時間の睡眠時間でも元気に生活していた修道士たちが、非常に疲れ、病気にかかりやすくなった。修道院長は睡眠時間を増やし、700年間続いてきた菜食の掟を破って肉とジャガイモを中心に食事を変えてみたが、望ましい結果は見られなかった。」 真の原因は修道士が聖歌を歌わなくなったことにあった。実は聖歌を歌うことの中に実に不思議な効用が秘められていたのである。

とどめておき、毎日の日課として、常に箱の前で仕えさせた。」

- ① シオンに運び上げられた神の箱は、ダビデの幕屋の中心に置かれたが、ダビデは途切れることなく賛美がささげられるように計画を立てた。
- ② 詩篇には、昼も夜も、絶えず(24時間)の賛美がささげられていたことを記している。詩篇35篇28節、134篇1～3節参照。
- ③ 新約時代においても、イエスの弟子たちは「いつも宮にいて、神をほめたたえていた。」(ルカ24章53節)。また、「それゆえ、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。」(ヘブル書13章15節)と勧められている。

(3) 様々な楽器と熟練した者たちによる賛美

◆ I 歴代誌15章17～28節参照。そこには当時の賛美の様子をうかがわせる情報がある。

- ① 17節には、賛美リーダーのリストが載っている。ヘマン、アサフ、エタンの三人。
- ② 18節には「第二の部類」に属する人々のリストが載っている。
- ③ 19節には、三人の賛美リーダーが歌うだけでなく、青銅のシンバルを持って歌ったことが記されている。
- ④ 20節には、十弦の琴(今日のハープ?)を奏でる者たちのリストが記されている。これらの楽器は「アラモテ」と合わせられた。「アラモテ」とはヘブル語の「アマテ」(処女)から来ており、「ソプラノ、高音部」を意味する。成人した男性の声と共に、高音部が出る処女の声と合わせられたと考えられる。I 歴代誌25章5節を見るなら、ヘマンには14人の息子の他に、3人の娘たちがいたことが分かる。
- ⑤ 21節には、「八弦の琴」を奏でる人々のリストが載っている。この楽器は「アラモテ」と比べて逆にオクターヴ低く、今日のベースに近い。
- ⑥ 24節には、ラッパを吹き鳴らす祭司たちのリストが載っている。祭司のみがラッパを吹くことができた。
- ⑦ I 歴代誌25章7節には「主にささげる歌の訓練を受けた・・彼らはみな達人だった。」とある。ダビデは賛美を担う者たちに、他の働き手にも、熟練した力(霊的な能力、奏楽の技能)を要求している。

(4) 一致した賛美

◆大勢の人々、また多くの楽器が用いられれば、それだけ一致が要求される。そのため賛美する者たちは心と声をつににする訓練が求められた。II 歴代誌5章13節。そのような一致した奉仕の結果、神の宮が栄光で満たされた。

(5) 多様な表現方法による賛美

- ① 大声で叫ぶ(詩篇66篇1節)
- ② 喜びをもって賛美する(詩篇95編1～2節)
- ③ 手をたたく(詩篇47篇1節)
- ④ 手を上げる(詩篇63編4節、134篇2節、141篇2節)
- ⑤ 種々の楽器を使う(150篇3～5節)

- ⑥ 踊りながら(詩篇30篇11節、149篇3節、150篇4節)
 - ⑦ 頭をたれ、ひざまずいて(詩篇95編6節)
- ◆このように、ダビデはただ一つの表現だけではなく、あらゆる可能性をもって表現する礼拝を取り入れたのである。

2. I 歴代誌16章にみる礼拝用語の豊かさ

- ① 16章8節～36節の中にある礼拝用語、つまり、動詞に注目して、それをチェックしてみよう。!!
- ② 命令形で書かれているものは、「・・・ます」という表現で統一しよう。
例えば、「呼び求めよ」という命令形を「呼び求めます」というように。
- ③ チェックした用語を、あるカテゴリーでまとめる工夫をしてみよう。
例えば、賛美・「たたえます」「ほめ歌います」「喜び歌います」等
信頼・
渴望・
宣教・ というふうに。

3. ダビデの神殿礼拝のヴィジョン

◆ダビデの主の宮建設は、まず土地取得から論じられなければならない。なぜなら、そこにダビデの礼拝者としての大切な真理が隠されているからである。

(1) ダビデの罪とオルナンの打ち場で築いた祭壇

- ① I 歴代誌21章にはダビデの罪が記されている。その罪とは何か。その罪の赦しのために、エブス人オルナンの打ち場に祭壇を築くよう、先見者ガドは主からのみ告げを語った。ダビデはオルナンからの無償の提供を断り、代価を払って土地を買い、そこに祭壇を築いた。主はダビデのいけにえを受け入れられた。
 - a. [教訓]・・・犠牲を払うことのない礼拝はあり得ない。犠牲が払われるところに神への服従が示されるからである。
 - b. [疑問]・・・なぜダビデはギブオンにあるモーセの幕屋に向くことがなかったのか。21章30節参照。
 - ② ダビデはその場所を神殿建設の場所として決意する。I 歴代誌22章1節。
 - a. その宗教的意義は何か・・・神殿の場所が常に「ダビデの罪と悔い改めの記念の場として、神の赦しと和解をいつも覚えさせる」ことにあったと考えられる。
 - b. かつてそこはアブラハムが息子イサクを神に犠牲としてささげようとした所でもあったことを想起させるため。II 歴代誌3章1節。
- ◆ここに礼拝における歴史的な連続性(つながり)をみることができる。

(2) ダビデの神殿建設のための準備

- ① [志を持ち続けてきたダビデ](22章)
 - a. I 歴代誌17章4節に表された神のみこころの真意が22章8節に記されている。
 - b. 志(夢見る心)と同時に、それを実現に至らせてくださるのは神である。ピリピ2章13節。
 - c. 夢を実現する四つの責任
 - 開始の責任(十分な心の準備、可能性の検討、そして「いつ始めるか」が肝心)

- 持続の責任(後ろを振り向かない)
 - 専心の責任(自分のすべてを注ぎ込む)
 - 完了の責任(はじめたことを最後までやり遂げる)
- ② [建設のための資材と人材の準備]
おびたしい資材と熟練した人材が用意された。22章「用意した」の語句に注目。
- ③ [ヴィジョンのシェア]
a. 目的・「全地の名となり、栄えとなるため」「主のために」(22章5節)
b. 規模・「大いなるもの(壮大なもの)」(同上)・・・その質において。
- ④ [神殿建設の間取り、材質、器具、すべての仕様書]
御霊の示しにより、ダビデが示されていたすべてのものの仕様書きをソロモンに授けた。I 歴代誌28章12節参照。

(3) 神殿礼拝のヴィジョン

- ① [責任の重い職務としての奉仕] (I 歴代誌23章3～5節、25章7節)
- a. 主の宮で奉仕するレビ人の資格・・・イスラエルにおいて一人前の男として数えられるのは20歳以上であった。しかしダビデの時代、主の宮に関わるレビ人は30歳以上であった。つまり単に一人前以上のものが要求されている。つまり職務の責任の重ゆえに、より厳しいものが要求された。主の宮で奉仕するレビ人は30歳以上の者で3万8千人いた。レビ人のうち4千人は「ダビデが賛美するために作った楽器を手にして、主を賛美する者」として登用された。
[教訓] 教会において、単なる能力、器用さ、期待だけで責任をゆだねることの懸念。
教会における、賛美のための楽器の登用について。
- b. 特別に訓練を受けた288人の賛美奉仕者・・・I 歴代誌25章7節には、特別に訓練を受けた賛美奉仕者がいた。しかも、各12人ずつ24組に分けて、順番に奉仕に当たったのである。ダビデは祭司たちも24組に分けて奉仕に当たらせている。
- ② [賛美しながら預言する者の選出] (25章1節)
- a. 音楽をもって賛美しながら、「預言」をするという新しい要素がみられる。
b. 預言する者は、アサフ、ヘマン、エドトンの三派から選ばれ、各派のリーダーの指導(権威)の下でなされた。
c. どのような預言がなされたのか。その手がかりはII 歴代誌20章14～17節参照。

4. I 歴代誌29章に見る礼拝者ダビデの姿

(1) 礼拝とは、自らをささげる能動的な行為である

- ① [全力を尽くして] (2節)
- ② [喜びのあまり(喜びにあふれて)] (3節)
- ③ [最高のものをささげる] (4節)
- ④ [みずから進んでささげる] (5節)
- ⑤ [リーダーたちが率先してささげた] (6節)
- ⑥ [全き心で] (9節)
- ⑦ [直ぐな心で] (17節)

(2) 礼拝とは、神の主権性を認めて、主の御前にへりくだること

- ① [返還意識]・「私たちは、御手から出たものをあなたにささげたにすぎません」(14節)
- ② [全き献身]・全焼のいけにえを伴った礼拝(21節)

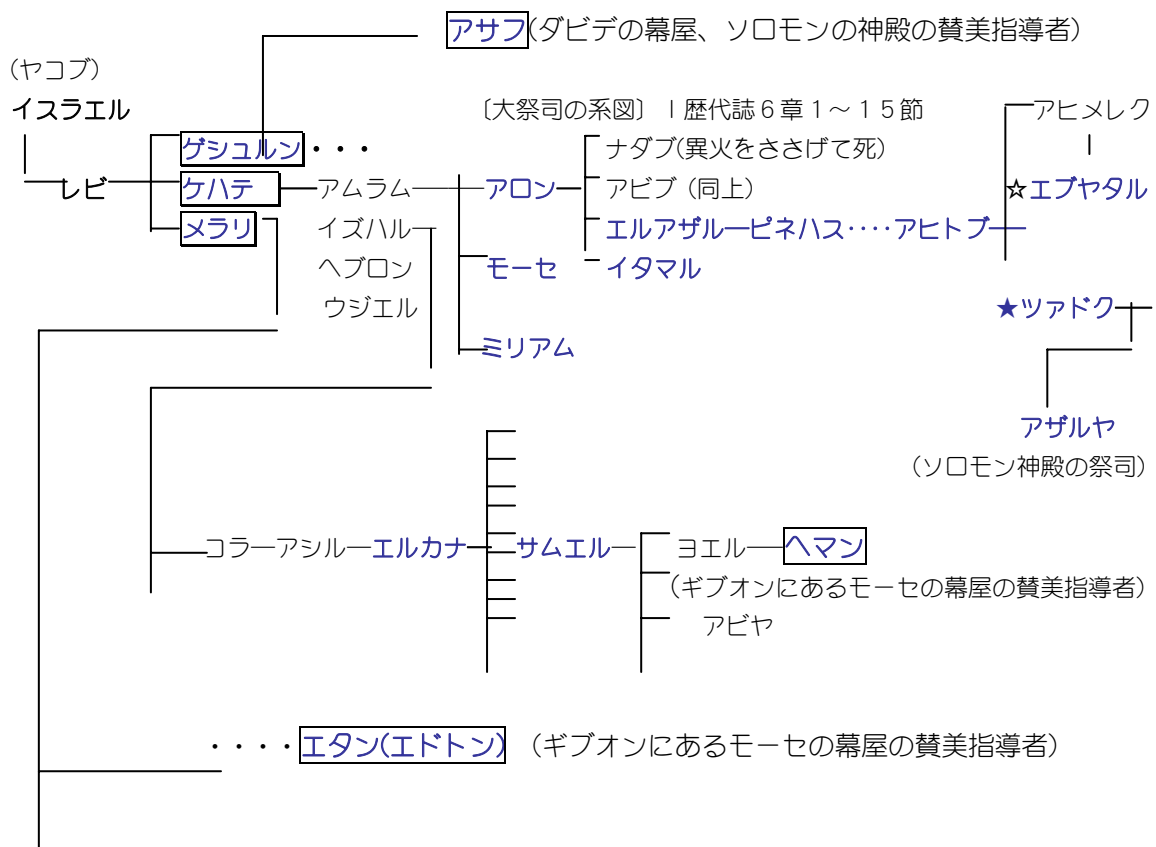
〔参考図書〕

グラハム・トラスコット著「ダビデの幕屋の回復—『神の臨在の力』(上巻・下巻)

(生ける水の川、1993、1996)

◆本書、**Truscott, Graham, The Power of His Presence**の初版は1969年。この初版が発刊されて以来、「ダビデの幕屋の回復」について、多くの神の聖徒たちに啓示があたえられたことを著者は知らされた。著者は第二版のはしがきで、聖書学者の多くが、「ダビデの幕屋の回復」についての預言を、霊的な祝福と喜びを受け取ることを目的としていないと述べている。そして一方、ダビデの幕屋の回復についてのメッセージを受け入れた人たちが、多くの祝福を経験し、霊的な拘束を破壊し、解放された教会がリバイバルされていると述べている。ダビデのように「主の前に立つことの喜び」(詩篇21篇6節)を見出すためには、聖書の方法に従って、神を賛美し、礼拝することにある。今日でも神を賛美する神の民が残されている(詩篇22篇3節)、と著者は述べている。

祭司、及びレビ族の系図



- ★ダビデの四男アドニヤのクーデターに加担したことにより、祭司として失脚させられる。
- ★ギブオンのモーセの幕屋の祭司を務めるダビデの側近。捕囚後、エルサレムに帰還したイスラエルの指導者である大祭司ヨシヤとエズラはこのツアドクの子孫である。この家系は主に対して忠実であった。

D. モーセの幕屋とダビデの幕屋の総合としてのソロモン神殿の礼拝神学

1. ダビデの神殿礼拝の具体的構想

◆ダビデはシオンに契約の箱を安置し、そこで四六時中賛美のいけにえをささげさせた。同時に、ダビデはギブオンにあったモーセの幕屋にダビデの側近である祭司ツアドクを遣わし、また賛美のためにヘマン、エタンらの有能な賛美指導者も遣わした。この事実は、ダビデがシオンの幕屋礼拝とモーセの幕屋を統合し、やがて建てられる神殿において、イスラエルの民が神を礼拝する民として、より強化するヴィジョンの実現のための準備であったと考えられる。

2. モーセの幕屋の礼拝神学

(1) 【神に近づくための啓示】

レビ記には神に近づくための5つのささげものが記されている。

- a. かおりのささげもの(自発的)・全焼のいけにえ^{*1}、穀物のいけにえ、和解のいけにえ
- b. かおりのないささげもの(強制的)・・罪のためのいけにえ、罪過のためのいけにえ

(2) 【礼拝の秩序と礼拝者の聖別】

◆形式には本来いのちが秘められているものである。しかし、そのいのちが枯渇すると形骸化した形式のみが残る。特に、モーセの幕屋におけるすべての秩序と形式は、人が神に近づく秩序として、また深い意味あるものとして啓示されたものである。

◆教会史にみられる様々な礼拝スタイルは、それなりの礼拝に対する神学(考え方)が土台となっている。今日のプロテスタント教会(福音派)の礼拝の流れは、マルチン・ルターのドイツミサの流れを土台としている。

3. ダビデの幕屋の礼拝神学

(1) 【主の臨在こそわがいのち】

◆ダビデは何にもまさって主の臨在を慕い求めた。詩篇16篇8節、11節。27篇4節参照。主の前に出て、他のすべてのことを忘れて主の御顔を慕い求め、その麗しさに浸る。本質追求。形式にとらわれない。神の真理の啓示にいつも開かれた態度を取る。新しい皮袋。

(2) 【賛美の中に臨在される主】

◆詩篇22篇3節「・・あなたは聖であられ。イスラエルの賛美を住まいとしておられます。」。「賛美を住まいとする」とは、賛美を受けるにふさわしい(その価値を有する)方という意味である。

注1 全焼のいけにえ(レビ1章)。「<へ> オーラー。オーラーは<へ> アーラー(「上がる」「のぼる」という意味)の派生語である。このいけにえの顕著な特色は、それが祭壇上で全く焼き尽くされたということである。これに比して、すでに記したこれ以外の動物のいけにえは、ただ、その脂肪の部分のみが焼かれたのである。全焼のいけにえは、なだめのささげものであったが、これに加えて、もう一つ概念、すなわち、主に対して礼拝者が全く聖別されることを意味したのである。規則正しく、また、常にささげられなければならないために、それは「絶やすことのない」全焼のいけにえと呼ばれた(出29:42)。そして、人が食する部分が少しも残されなかったため、「全焼のささげ物」とも呼ばれた(申33:10、詩51:19)。これは、神との正しい契約関係にあるイスラエルの民が、聖所の務めのため、毎日、規則的に、朝と夕、ささげるように命じられた標準的な唯一のいけにえである。常供のささげものとも言われている。

◆ダビデの幕屋においては、動物のいけにえではなく、霊的ないけにえ、つまり「賛美のいけにえ」「喜びのいけにえ」「感謝のいけにえ」「従順のいけにえ」「砕かれた(悔いた)心のいけにえ」「義のいけにえ」が、音楽を伴う歌と祈りを通して、つまり、くちびるを通して告白され、宣言された。くちびるによるいけにえは、しばしば心の多様な感情的表現を伴った。これはモーセの幕屋での礼拝では乏しかったものである。

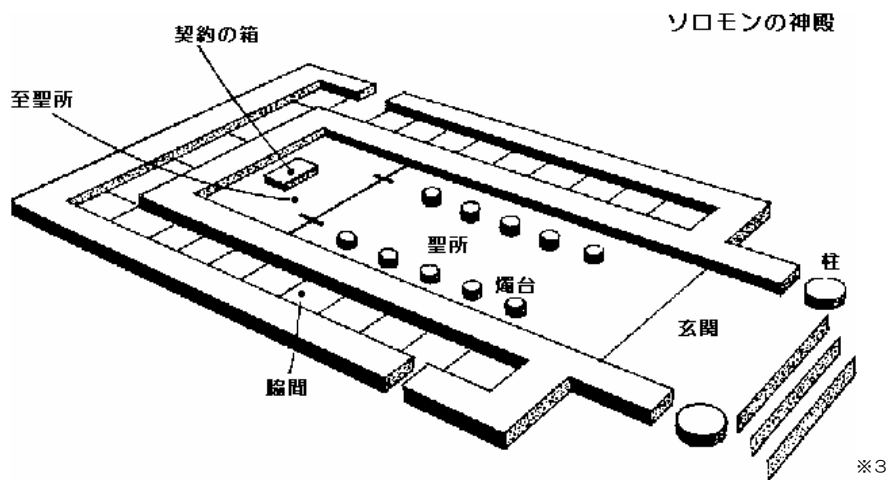
4. ダビデの幕屋とモーセの幕屋との総合としてのソロモン神殿の礼拝神学

- ① シオンに置かれたダビデの幕屋は、いのちに満ちた全く新しい革新的な礼拝であった。
- ② しかし、それを制度化し、組織化し、国全体に定着させるためには、神がかつて啓示されたモーセの幕屋の礼拝秩序を必要とした。少なくともダビデはそう考えた。一度はいのちを失ったモーセの幕屋であったが、再び、いのちが回復されるようになったからである。
- ③ 神殿における礼拝は、国およびイスラエルの民の生活全体の中心となるべきものであった。

5. ソロモン神殿における賛美礼拝

(1) 【ソロモン神殿の規模】 (Ⅱ歴代誌3章1～3節)

◆その大きさは「長さ60キュビト、幅20キュビト、高さ30キュビト」とある。モーセの幕屋と比べて、実に2倍に拡大されている。^{※2}



(2) 【ソロモン神殿の賛美礼拝制度】

- a. ダビデの目指した賛美礼拝は、組織的で、世襲的音楽専門家集団が存在した。
- b. 組織的な賛美礼拝はダビデ以降、ソロモンで発展し、定着するに至る。芸術的領域ま

注2 神殿は必ずしも特別に巨大であったとは言えない。むしろそれに使用された資材や、装飾品、調度品の質に、ソロモンは最良の物、高価な物を用いたようである。至聖所の内部だけで使われた金は6百タラント(1タラントは34キログラム)、つまり約20トン強の量である。

注3 ソロモンの神殿の復元図は学者によって異なる。なぜなら、聖書の記述はすべての情報を完全に提示していないからである。

で高められた賛美とその内容は、やがて『詩篇』として集大成されることになる。

(3) 〔第二神殿〕（ゼルバベルの神殿）

◆捕囚解放後、再建された第二神殿は、まさにダビデが規定し、実際にソロモンの神殿でなされていた賛美礼拝を受け継ぐ形で復活したのである。しかしその規模においては、ソロモンの神殿をしのぐことはなく、質素なものであった。

エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記

一神の民の再建事業一

1. 三書(エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記)に共通する歴史的背景と思想

- ◆旧約の歴史書一次の三書—はいずれも、バビロン捕囚からの帰還後の歴史を背景としている。エズラ記、ネヘミヤ記は、エルサレムを舞台とし、エステル記はペルシヤの首都スサを舞台にしている違いがあるが、当時、全世界を征服したペルシヤ帝国の支配がその背後にある。エズラ、ネヘミヤ、エステル、いずれもペルシヤの王の圧倒的好意を受けているが、立場そのものは少しも変わっていない。「この<宙ぶりん>の民族の運命、それを支え導かれる神の存在を信じ、体験し主張しているのが、この三書の共通の思想である。」(鍋谷堯爾著「信徒のための聖書講解⑩『エズラ、ネヘミヤ、エステル』」聖文社、1971)。帰還それ自体と、帰還した民の神殿や城壁の再建事業、およびエズラやネヘミヤの派遣、すべてがペルシヤの膨大な国費によってなされた。
- ◆エズラ、ネヘミヤ、エステル記のみならず、預言書のハガイ、ゼカリヤ、マラキ書もこのペルシヤ帝国時代のイスラエルの民に関連した記録として重要である。

539年 クロス王、バビロンを倒してペルシヤを起こす。 この帝国は2百年間続く。	}	エズラ記 1～6章 <神殿の再建> ^{注1}	
536年 エルサレム帰還および神殿再建工事が開始される。 クロス王の息子カンビセスが即位。BC525 エジプト王国を支配下に置いた。		}	ハガイ書、ゼカリヤ書
521年 ダリヨス王一世が即位。 520-515年 神殿工事が再開、完成する。			エステル記
486年 クセルクセス一世(アハシュエロス)が即位 479年 エステル王妃となる。 475年 ユダヤ人虐殺計画、未遂に終わる。 464年 アルタシャスタ王一世の即位 458年 エズラの帰還	}	エズラ記 7～10章 <神の聖なる民としての再建>	
445年 ネヘミヤの帰還		ネヘミヤ記 1～7章 <聖都エルサレムの城壁の再建> ^{注2} ネヘミヤ記 8～12章 <神の聖なる民としての再建> ^{注3}	
433年 ネヘミヤ再びエルサレムに帰還。		ネヘミヤ記 13章 / マラキ書	

注1 ◆クロス王の勅令によって命じられた神殿の再建は、帰還した人々にとって最も重要な任務であった。神殿は、神が選ばれた民の中に臨在し、まことの礼拝がささげられる場所である。したがって、祭司食、また神殿で奉仕するレビ人たちの職務は重要なものであった。しかし、神殿が再建されるまでは困難を極めた。このために用いられた指導者は、ゼルバベルと大祭司ヨシヤであった。新しい神殿は、かつてのソロモン時代のような華麗さはなかった。

注2 ◆神殿と聖都エルサレムは分かち難く結びついている。神殿が再建されたとき、エルサレムの城壁はまだ修復されていなかった。ネヘミヤはこのことで心を痛め、不思議な神の導きによって、エルサレムに帰還し、強い愛国心と敬虔さと民の助けによって、5日間というわずかな日数でこの膨大な仕事を成し遂げた。

注3 ◆帰還した民が聖なる民としての新しい共同体意識を再建するために、祭司であり律法学者であったエズラと総督ネヘミヤは、神の律法を厳格に守ることによって成し遂げようとした。これがユダヤ教の始まりである。

2. エズラ記の構造と概要

(1) 構造

1～6章	7～10章
神殿の再建 ー帰還から神殿完成までー	律法による民の再建 ーエズラの活動ー

◆第1～6章には、紀元前537年のクロス王の勅令とゼルバベルと大祭司ヨシユアの下に行われたユダヤ人の帰還など、エズラがエルサレムに到着する60年から80年前に起きた出来事が記録されている。第7～10章には、エズラのエルサレムへの帰還の様子が描かれている。

(2) 概要

①神殿の再建(1～6章)

◆「油そそがれた者クロス」とイザヤが預言したごとく(イザ45章1節)、バビロンを打ち破ったペルシャ王クロスは、神の特別の器とされた。主が「クロスの霊を奮い立たせた(エズラ1章1)」のである。征服者ペルシャが出した勅命は、「捕囚のイスラエルは故郷に帰り、破壊された神殿を再建せよ。」という驚くべきものであった。しかも「主の御名によって」クロスは命じた(1章2～3節)。前代未聞の歴史的事件がここに起こったのである。

◆<第一次帰還>は大祭司ヨシユアと総督ゼルバベルによって率いられた。ゼルバベルはダビデの子孫ではあったが、もう王とは呼ばれない。ヨシユアは大祭司、アロンの子孫である。そして指導者はダビデの子孫の総督ゼルバベルではなく、大祭司ヨシユアである。以後、イスラエルの最高の指導者は祭司に移った。それは王たちが偶像礼拝を行ったためにイスラエルが滅びることとなったからである。そのために義しく礼拝を導く祭司が指導者となった。そして祭司の働きによってイスラエルの将来が決定づけられるようになったのである。

◆帰還した人々は、BC537年に「エルサレムの神の宮の礎を据え」た(エズラ5章16節)。しかし、クロス王の生存中に再建はそれ以上進まなかった。あまりにも荒廃したエルサレムに人々の意欲がそがれてしまったからであり、人々自身もあまりにも貧しかったからである。この当時のユダヤ人の持つ意識については、預言書ハガイ、ゼカリヤに書かれている。まだ人口が十分に回復していなかったことと、また近隣の人々、特にサマリヤ人の妨害があったからである(エズラ4章1節～4章5節)。クロス王の息子であるカンビセスは、サマリヤの長官との往復書簡で、エルサレムを武装化することはペルシャ帝国の安泰と秩序を乱すものとなる、という進言を受けて神殿工事を中止させたからである(同、4章7～23節)。

◆クロスの勅令から18年後に、預言者ハガイとゼカリヤは勇気を失っていたユダヤ人を励ました。また、ダリヨス王はクロスの勅令を確認し、中止から15年目になって再建が許可した(同、6章7、8節)。^{注4} 工事は順調に進み、4年後に神殿は完成した(6章13～18節)。

^{注5}

注4 ◆バビロン帝国では帝王は自分のやりたいことを何でもできた。しかし、ペルシャ帝国はバビロン帝国とは違い、ひとたび制定された法律は変えることはできなかった。

注5 ◆後になって、ヘロデ王はこのゼルバベルの神殿を壊して、もっとも大きく美しい神殿を建てた。福音書で神殿についてのべられるときは、ヘロデ王の造った神殿のことである。しかし律法学者たちは捕囚後に再建された神殿

② 律法による民の再建—エズラの大規模な改革—(7～10章)

◆神殿が完成した後、エズラが歴史の舞台に登場するのは、それより約 60 年後のことである。その頃になると民全体の信仰は墮落の一途をたどるようになっていた。

◆<第二次帰還>を率いたのは、祭司であり、律法学者のエズラであった。彼の改革によって以来、ユダヤ人は偶像礼拝をしなくなった。エズラが果たした功績をまとめてみよう。

- a. エズラはモーセの律法に精通し、学者として指導的な立場に立って教えた。
- b. 祭司の立場から祭儀的改革を施し、人々の心を主に向けようとした。具体的にはダビデが目指した賛美礼拝のヴィジヨン—ソロモンの神殿礼拝—に焦点を当てた。エズラの改革によって大祭司が頂点に立ち^{注6}、礼拝が規則正しく執行されるようになった。
- c. 律法の意味を研究し、それを人々に教えるために、シナゴーク礼拝が組織された。それにともない律法を教える学者たちが台頭する。
- d. 彼は人々に異教徒との混交をきびしく禁じただけでなく解消させた。以前にゼルバベルに率いられて帰っていったユダヤ人男性の多くが契約外の結婚をし、自らを汚していたからである。この中には指導的立場の者も含まれていた。^{注7} エズラは彼らの不信のために悲しみをもって祈り、彼らに異国の妻子との絶縁することを誓わせた。9章1節～10章17節参照。
- e. 律法の朗読を公の礼拝の中に取り入れた。また、旧約聖書の正典を結集させて個人的にも聖書を読めるようにした。

◆エズラはこのように律法を中心として民の意識改革を断行していった。ここから神の民イスラエルはユダヤ人と呼ばれ、ユダヤ教が始まったとされている。

3. ネヘミヤ記の構造と概要

(1) 構造

1章～7章4節	7章5節～13章
エルサレム城壁の再建	エズラ・ネヘミヤによる民の再建

◆<第三次帰還>を率いたのは、祈りの人と言われるネヘミヤであった。彼はペルシャ王アルタクセルクセス一世の高官・献酌官であった。エルサレムの城壁が崩れたままの荒れ果てた現状を知らされ、4ヶ月の祈りが聞かれて、大胆にも王に直訴する機会に恵まれた。ネヘミヤは王から全権を委任され、ユダの総督として、エルサレムの町と城壁の再建のために、護衛つきで派遣されたのである。BC444年のことである。ペルシャ支配からユダヤ人は行政権を持つてはいなかった。サマリヤの州の一部に過ぎず、これが常に不穏な状況を作り出していた。行政権をもった州として独立するには城壁によって守られた首都を持たなければならなかった。

とヘロデ王の造った神殿を同一視して、それを第二神殿と呼んだのである。

注6 ◆後にエズラは大会堂と呼ばれる議長となる。これは 120 人によって構成された組織であって、後に 3 世紀になってからこの組織はサンヘドリン(最高議会)が引き継ぐことになる。サンヘドリンは 70 人の議員によって構成されるが、その議長は大祭司である。その構成員は、祭司たち、パリサイ主義者たち、長老たちとである。このように大祭司は宗教的な役割だけでなく、政治的な役割をも兼ね備えることとなった。しかしこのサンヘドリンも、AD70 年にエルサレムとともに崩壊することになる。

注7 ◆異邦の女と結婚することは律法によって禁じられていた。出エジプト記 3 章 15～16 節。申命記 7 章 3 節参照。異邦人との雑婚が禁じられた理由は、それによって偶像礼拝をもたらすからである。

◆ペルシャがネヘミヤを派遣したのは、このような事情のもとであった。ちなみにユダヤ人を虐殺(ホロコースト^{注8})しようとする陰謀を打ち砕いたエステルは、第一次帰還後の60年後にダリヨス王の後継者であるクセルクセス一世(アハシユエロス)の王妃となっており、ペルシャ王宮内で、このころも生きていてその影響力を行使していたのかも知れない。

(2) 概要

①城壁の再建(1章～7章4節)・ネヘミヤのリーダーシップ

◆神殿が完成してから70年後に城壁が再建された。しかしこの事業においても、神殿建設と同様、敵の妨害を余儀なくされた。しかしネヘミヤは祈りをもってこれに対処し、戦っていく。ネヘミヤを通してリーダーシップについて多くを学ぶことができる。

- a. 誠実さという資質・・・ネヘミヤが献酌官であったという事実 i (1章)
 - i i i 権威に従うという訓練の必要・・・ネヘミヤは自分の置かれたところで忠実に仕えた。
 - ii 王から信任されていた・・・それゆえ献酌官として抜擢された。
- b. 現実を正しく認識し、問題を自分の重荷と受け止める・「泣き、断食して祈った」
 - i 現実の問題を正しく認識すること。
 - ii 神の御名が辱められているという現実に対する聖なる憤り。
 - iii 現実の問題を自分の問題として捉えた。神の家は連帯的なものである。
- c. 祈りの力を知っている・・・門は開かれる
 - i 問題を神の御前に持って行った。リーダーとしての働きはまず祈りからの出発である。
 - ii 祈って待つことの重要性を知る。ネヘミヤは四ヶ月待った。そして答えがきた。(2章)
- d. 戦いに備える (2章)
 - i 神のみこころがなされるときには、必ずといっていいほど反対が起こることを予測し、その戦いに備えなければならない。
 - ii 周到な準備・妨げを防ぐための極秘の調査、行動計画を立てるための十分な時間と現実を正しく認識するための正確な情報を得る。
 - iii 動機づけ。これは人を動かしていくためのリーダーの最も重要な**責務**である。動機づけは、良いフォロアーシップを生み出す。2章18節。
- e. 組織力 (3章)
 - i 目標を達成するために、メンバー全員を参加させる能力。
 - ii 目標を達成するために、持ち場の各リーダーに必要な権限と責任を委任する能力。
 - iii メンバー間の意思の疎通や、指示系統の一元化をはかる能力。
 - iv メンバーの協力体制を整え、意欲をもり立てる能力。
- f. 危機管理能力 (4章、5章)
 - i 批判に対処する能力
 - ii 常に最悪に備える心構えをする
 - iii 冷静さを保つ

注8 ◆ホロコースト(holocaust)は、ギリシア語の「ホロ」、「完全に」に由来し、「コースト」は「焼き尽くす」に由来する。現代では、ナチスドイツによって第2次世界大戦前・中に行われたユダヤ人大虐殺を指す。ヒトラー率いるナチスは約600万人のユダヤ人をガス室送りにするなどして殺害した。

②神の民の再建・ネヘミヤ記 8章～13章

◆「こうして、城壁は五十二日かかって、・・完成した」(6章15節)とあるように、城壁再建という神の事業は完成したが、それはいわば外枠だけであり、神の事業はそれによっては終わらない。さらに困難な神の民の再建という事業が待っている。ネヘミヤのリーダーとしての働きは、建物ではなく、神の民そのものに向けられていく。神の民を神のために民を教育すること、これが最も大きな課題であり、チャレンジであった。

◆イエス様も収穫のための働き手を求めておられる。その働き手とはどのような働き手であるかを話し合ってみよう。

◆神のみことばによる神の民の育成は**今日的課題**でもある。つまり、キリスト者の弟子化である。使徒の働き20章32節「いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成・・することができます」とあるように、みことばは育成する力をもっている。Ⅱテモテ3章15～17節「聖書は、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益」それは、「神の人が、良い働きのために十分に整えられた者となる」ためである。みことばに熟練した人が育つのにどのくらいの時間がかかるだろうか。

(3) 神のことばによる人材教育

◆ネヘミヤはまず神のことばを出発点とした。この目標達成のために、ネヘミヤは律法学者のエズラを起用した。本格的な神の民の再建はエズラのリーダーシップにゆだねられた。

①みことばを聞く訓練(聞くことは、従うこと)

- i 朝から昼まで・・民は起立して律法の朗読を聞いた。(8章1～8節)
- ii エズラをサポートする祭司たちの存在・・チームとしてのミニストリー
- iii 神のことばの解き明かしをするレビ人の存在

②民たちに主を見上げさせ、主を喜ぶことの訓練(8章10節)

「主を喜ぶことはあなたがたの力です」・・・ピリピ書における「喜び」

- i 環境に支配されない喜び(ピリピ1章)
- ii 人々の存在に支配されない喜び(ピリピ2章)
- iii ものに支配されない喜び(ピリピ3章)
- iv 思い煩いに支配されない喜び(ピリピ4章)

③神との個人的契約を交せる教育・・[盟約](9章～10章39節)

- i 神との悔い改めの実を結ばせる。8章9節では「みな泣いていた」とある。神のみことばによって自分の罪、汚れを知らされることなしに悔い改めは起こらない。信仰生活における悔い改めの重要性(使徒20章21節)。ネヘミヤ9、10章は、神の民の悔い改めの実として盟約を結んだいきさつが記されている。
- ii 盟約とは何か(口語訳聖書では契約となっている)
盟約とは、神の契約に対する人間の主体的な、自覚的な、自発的な**<誓い>**という面が強調されている。「印を押す」ことによって公の文書とした。
- iii 民をして盟約に至らせたものは何か・・9章38節「これらすべてのことのゆえに」に関係がある。その前の賛美と祈りは「神が民に対して何をされたか」「神の民が神に対して何をしてきたか」が言及され、その結論は33節「あなたは誠実をもって行なわれたのに、私たちは悪を行なった」という告白により悔い改めて神に立ち帰った。
- iv 盟約の内容
 - 神の民の価値観を持って生きることの告白・・雑婚の禁止(10章30節)
 - 礼拝の重視の告白(31節)・・・安息日の厳守(31節)
 - 愛を持って生きることの告白・・安息年の規定を守ること(31節)

- 神の宮の働きのためのささげもの告白・初物ささげる、十分の一献金(3 2節)
- ◆これらの盟約はすべて「**神の宮をなおざりにしない**」という一語に要約できる。この盟約が当初、すべて神の恵みと感謝によるわざとして行われたところにいのちがある。これが形骸化するところに律法主義が生まれる。
- ◆エルサレムでの城壁奉獻式が済んで、ネヘミヤはしばらくの間ペルシャ王のものへ帰っていった。しかし13章4節以降には、そのネヘミヤが12年ぶりに再びエルサレムに帰ったときには、10の盟約は反古になっていた。以下、三つの不祥事があった。神の宮に仕えるレビ人への給与が与えられないと言う事態の発生。安息日の形骸化。異邦の民と野結婚の拡大(信仰継承の危機)

◆これに対するネヘミヤの対応は厳しいものであった。しかしながら、ネヘミヤ記を通して神の民の再建という事業はいかに難しいものであるかを思わせられる。それは神殿の再建、城壁の再建のように、1回限りのものではなく、聖なる神の民としての絶えざる<聖別の戦い>を余儀なくされるからである。そしてそれは、救い主の待望を指向しているといえる。

(附記)	ペルシャ帝国とユダヤ
(ペルシャ王)	(ユダの出来事)
クロス(538-530)	538 シリヤ・パレスチナ、ペルシャの属州となる。
カンビュセス(530-522)	520 ゼルバベル、ヨシユアのもとに神殿再建開始。
ダリヨス(522-486)	515 エルサレム神殿完成。
アハシュエロス(486-465)→聖書ではクセルクセス	
アルタクセルクセス1世(465-424)	458 エズラの改革はじまる。 445 ネヘミヤの改革はじまる。
クセルクセス2世(424)	
ダリヨス2世(423-405)	
アルタクセルクセス2世(404-358)	
ダリヨス3世(336-331)	332 アレクサンダーによる征服。

4. エステル記の概要とプリムの祭りの救済史的意義

◆エステル記は、ペルシャ王アハシュエロスの時代に、ユダヤ人を絶滅しようとした陰謀がどのように未然にふさがれたかを示す物語である。

(1) 歴史的背景

(チェーン式バイブルより)

◆ペルシャのクロス王は前539年に勅令を出し、ユダヤ人を故国に帰るように促した。しかし、実際には、帰還した民はわずかで、その大部分はペルシャにそのまま残留した。彼らは外国での生活に慣れ、生活も安定し、いまさら、故国になど帰りたくない、というのが本音であった。ユダヤ人の中にも、エズラやネヘミヤ、またエステル記のモルデカイのように、ペルシャ帝国で高

い地位につく者が現われた。

◆本書の事件は、ダリヨスに次いで前486～465年までペルシャを統治したアハシュエロス(クセルクセス)の時代に起こった。エズラ記では6章から7章の間に当たる時代と考えられる。

(2) 概要

(登場人物)・〔アハシュエロス王、王妃ワシュティ、モルデカイ、エステル、ハマン〕

1章・アハシュエロスはペルシャ帝国の指導者たちを招いて宴会を催し、王妃ワシュティを招いた。ところが王妃はその命令を拒み、失脚させられる。

2章・王が新たな王妃を募集した時、モルデカイは自分の養女エステルを応募させた。王はエステルを選び、エステルはワシュティに代わって王妃となる。

3章・王の寵臣ハマンは、王国に住む全ユダヤ人の虐殺をたくらみ、王にざん言(注)して、その許可を取り、ユダヤ人虐殺を勅令として王国中に公布した。

(注・相手を陥れるために、相手を悪く言い、またありもしない事をつくりあげて、目上の人に告げること)

4章・ユダヤ人絶滅の危機を知らされたモルデカイは、王が勅令を取り消すよう取り計らってほしいと王妃エステルを説得する。

5～7章・エステルはその要請を受け入れ、機会をうかがいながら、ついにハマンを失脚させることに成功する。

8～9章・王は新しい勅令を出し、ユダヤ人自らの手でそのいのちと財産を守るようにし、ユダヤ人は大勝利を収めた。

◆以上の物語は、もともと、ユダヤ人がアダルの月(太陽暦の2～3月)の14、15日に行った<プリムの祭りの起源>を明らかにするためのものである。(9章17～32節) この祭りは、ユダヤ人がハマンの悪計から救われたことを記念するもので、エルサレムで祝う三大祭りとは違い、ユダヤ全土で盛大に行われた。プリムはプル(くじ)の複数形。9章24、25節はエステル記の要約である。人の投げるくじは、神の御手の中にあり、神はすべてをよきに変えられる。この信仰告白こそプリムの祭りの真意である。(チェーン式バイブル)。

(3) プリムの祭りの救済史的意義・ユダヤ人のためにとりなすという教会の使命

◆メシアニック・ジューの伝道者ジョナサン・バーニス師は、^{注9}このエステル記を(ルツ記とともに)終末におけるユダヤ人と教会の姿を示すものとして次のように解釈しているので紹介したい。

①<王妃ワシュティとユダヤ人の相似性>

◆これは新約のある箇所とよく似ている。マタイ福音書の22章にある王が王子のために婚宴を催した話である。彼は特別に名士たちを選んで宴に招いた。ところが、招かれた人たちは来ることを拒んだ。拒むということ以上に、彼らは使いに対して非常に粗末な扱いをし、さらに使いを殺してしまうという恐ろしいことをした。王は非常に憤り、軍隊を送って彼らを滅ぼした。それから王は「町の大通りへ行って出会う人を誰でも連れて来なさい」と言う。ここでは、預言者に対して従おうとしない頑ななユダヤ人をたとえて語っている。そして、神から遠く離れていた異邦人に門が開かれた、というたと

注9 ◆ジョナサン・バーニス師は、ユダヤ人であり、イエス・キリスト(イエシュア)を受け入れメシアニック・ジューの伝道者となった。現在、旧ソ連地区で大規模なユダヤ人伝道を行っている「ヒアール・オー・イスラエル」の代表として、ユダヤ人伝道に大きな成果を上げている。この講演は、1999年11月24日夜、JMFメシアニック親交会主催により豊橋市で行われた聖会での説教をまとめたものである。

えである。

◆エステル記の王妃ワシュティはユダヤ人を示している。非常に反抗的で頑固な民、なかなか神に従おうとしない。このことは王の怒りを燃え立たせる。そこで王は別の王妃を探し始める。こうして福音は誰でも信じる者に、異邦人に開かれることになる。

②<エステルは異邦人教会>

◆エステルは終末の教会のあるべき姿を表している。エステルは孤児であった。おじのモルデカイは彼女を引き取り、養育する。これはエペソ人への手紙2章12節を思い出させる。「また、そのころは、キリストとかがわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました。」これは孤児と同じである。このように、聖書は、イエス・キリストによって異邦人はイスラエルの神の方へ引き取られたのである。

③<エステル、身分を隠す>

◆エステルは王宮の婦人部屋の最も良い所へ移される。ここは大層興味深い箇所である。エステルはユダヤ人によって育てられたにもかかわらず、モルデカイは身分を明かしてはならないという。彼女はこの書の前半では、一貫して身分を明かしてはいない。これは教会についても同じである。というのは、二千年にわたってキリスト教は、ユダヤ性という身分を明かさないうまま地上に存在してきたからである。

◆王はどの女にもましてエステルを愛し、エステルは娘たちの中で王の厚意と愛に最も恵まれることとなった。そして王は彼女の頭に王妃の冠を置き、ワシュティに代わる王妃とした。これはイスラエルの神の前に、教会がこのような者になったことを表しています。イスラエルではなく教会が、イスラエルの神の好意を受けているのである。

④<迫害者ハマンの登場>

◆ここで新しい人物が登場する。彼はサタンの型である。ハマンはユダヤ人を迫害するようにと王に進言し、王からその権限を与えられる。ユダヤ人は言う。「どうして私たちはこんなに迫害されるのか。何千年もの間」と。それはサタン自身がその発信源だからである。この世がユダヤ人を嫌うのは、サタンがこの世の君だからです。サタンは神を嫌っている。そしてユダヤ人が神に選ばれたということに注目している。

⑤<サタンに与えられたユダヤ人迫害の権威>

◆王はハマンの言葉に同意し権威の指輪を与えた。全ユダヤ人を殺してもよいという布告が出てしまった。

⑥<王の前に行けないモルデカイ>

◆モルデカイは門の中には進めない。王の前に行く道が無い。ここではモルデカイを通して、盲目となっているイスラエルの現状を型として見せている。これはメシアを通して、誰も主のもとへは行けないからである。

⑦<教会の役目はとりなしの祈り>

◆しかしモルデカイはエステルに王の所へ行って欲しいと頼む。これは、教会の最も重要な役割が王なる神にとりなしの祈りをするを意味している。モルデカイは言う。「・・・自分は王宮にいて無事だと考えてはいけない。・・・この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか。」反ユダヤ主義の波はまた襲ってくる。今、クリスチャンたちがユダヤ人を祝福し、ユダヤ人のために立ち上がらなければならない。神はイスラエルに関して、私たちに挑戦状を突きつけている。これに対するエステルの答えは「私は王のもとに参ります。このために死ななければならないのであれば、死ぬ覚悟であります。」であった。

⑧<約束の成就を助けるのが教会の役目>

◆エステルは王の前で自分がユダヤ人としての素性を明かす。そしてエステルは王の前

旧約聖書概論3 旧約の歴史書Ⅰ(歴代誌～エステル記)

に好意を得た、そのお陰でユダヤ人は救われたのである。今日のキリスト教会はユダヤ人に対して大きな影響力を持っているのである。神がイスラエルに与えた約束を成就されるに当たって、助ける事ができるのはまさにエステルだけ。つまり教会のとりなしによるのである。教会はこの時のために召されたのではないか。

旧約聖書の歴史書(2)の結論

1. 歴代誌、エズラ記、ネヘミヤ記の主題は、神の民の再建である。

◆エステル記を除く、旧約聖書の歴史書の三書一歴代誌(第一、第二)、エズラ記、ネヘミヤ記—に共通する主題は<神の民の再建>である。

2. 神の民とその再建の現実

(1) 何が再建されるべきか

◆<捕囚からの帰還による再建>という場合、目に見える具体的なものとして、二つのものが再建されたことは紛れもない事実である。そのひとつは<神殿の再建>、もうひとつは<城壁の再建>がそれである。この二つが捕囚から帰還したイスラエルの民の偉大な事業だったことはいままでもない。しかもそれは多くの困難や妨害と戦いつつ成し遂げられた事業であって、神の恵みにより、信仰によって勝ち取られたものであることは議論の余地もない。しかし、目に見えるものは一時的であり、見えないものこそ永続するのである(コリント第二4章18節)。

◆神が望まれ、当時の指導者たちが目指していたものは、「見えないもの」の方の再建であり、見えるものの再建はその一表現にしかすぎなかった。イスラエルの場合、再建されるべきものは、<神の民としての信仰的姿勢>であった。この再建なくして、単なる物質的建造物の再建で終わったならば、捕囚からの帰還という神の恵みは無駄になってしまう。捕囚帰還という賜物とともに、イスラエルにとって、<神の民としての信仰的姿勢の再建>(聖なる神の民としての再建)という重大な課題が与えられたことを見落としてはならない。

◆歴代誌の著者はその課題を明確にした。すなわち、イスラエルの民が、礼拝の民としてのアイデンティティを確立させるため、契約の箱をシオンに安置し、神殿建設を準備したダビデと、それを実際に建設したソロモンの偉業を想起させ、礼拝の重要性を再認識させようとしたことはすでに述べた(本講義レジュメ8頁参照)。

◆そこで目指されているのは、詩篇100篇にもあるように、神の民が、心からの感謝と賛美をもって主の御前に近づくこと、喜びをもって主に仕えること、そして、主こそ神であることを知ること、であった。これこそが、いつくしみと恵みと真実に満ちた神との関わりにおいて最もふさわしいことであり、霊とまことをもって礼拝する礼拝の民の信仰的姿勢と言える。

(2) 何が再建されたか

◆捕囚という苦難の炉を通過したことにより、イスラエルは確かに偶像と絶縁した。そして、あの神殿再建という事業を通しては、途中で妨害があつて中断もしたが、神のことばによって奮い立って工事を再開し、完成に至ったことは、みことばに対する信頼、服従、献身という姿勢が確かにされたといえよう。この点は城壁再建についても同じことが言える。すなわち、見えるものの再建を通して、それとならんで、見えないもののほうの再建もなされていったわけである。

◆また、神殿再建工事が中断していた際に、預言者ハガイによって、神の宮をおるそかにして自分たちの生活を第一としている姿勢を指摘され、叱責されたことの結果、民が悔い改めたということ(ハガイ書1章1～15節)は、彼らの中に何が再建されるべきであったかという問題の所在を明らかにする。このような経過をたどって、二つの再建事業は完成した。それに伴って、<神の民の信仰的姿勢の再建>は完成したのだろうか。否！である。見えるものの再建は一帰還民にと

ってその事業は絶大な困難を伴ったには違いないが一見えないものの再建に比べるならば比較的容易であった。

◆もし、後者の再建が成功したならば、その後の歴史はもっと光栄あるものとなったはずである。そうはならなかったゆえに、神殿と城壁の再建以来、イスラエルの歴史は夕闇の中を低迷する。

◆神殿が完成した後のイスラエルの精神的状況をまとめて描き出すのはマラキ書である。そこに見る神の民の姿は、まことに情けない。彼らは神の愛を疑い(1章2節)、神への敬愛の念を失い(1章6節)、余り物、クズのような犠牲動物をささげて平然とし(1章13節)、ふてくされていた。マラキ書を読めば、このときの民の信仰状態は最低であったことが分かる。なぜそうなってしまったのか?

◆その理由は明らかである。彼らがハガイとゼカリヤの叱咤激励によって奮い立って神殿工事を再開したとき、それは多くの犠牲と困難を乗り越えての、まことに献身的な事業であった。そのとき、彼らの心の中に描いていたものは、これが出来上がることによって、彼らの神第一の姿勢があらわれ、その忠誠心が証明されたあかつきには、神はそれに報いて彼らの国に、昔の日のように、ダビデの時代の栄光を回復してくださるであろう、という期待感(希望)であった。

◆捕囚帰還後のイスラエル人の居住区は実に狭小であり、周囲の諸民族から圧迫され、貧しかった。現実が惨めなだけに、希望は切実だった。奇跡的な神の介入によってイスラエルが強大となり、周囲の諸国を征服し、神殿はソロモン時代を上回る華麗なものとして改修され、そこに人々は集まってこのような報いをくださった神をほめたたえる—このような夢が人々の心を燃やした。

◆ところが、神殿ができて事態は一向に良くならなかった。ユダヤ人たちの支配者はペルシャ人からギリシャ人に替わり、次はローマ人に替わって行く。マラキ書はまだペルシャ支配時代だったが、とにかく神殿完成をあれだけ犠牲を払って行なったのに、自分たちの現実は相変わらず惨めだ、というところから反動が起こったのである。

◆捕囚期以後の預言者たち、ゼルバベル、エズラ、ネヘミヤなどの人々の奮闘にもかかわらず、見えないものの再建ははかばかしくなかった。帰還後のイスラエルの一般的な人々の信仰姿勢は、どちらかというと、律法主義的傾向へと傾斜していった。やがて新約時代を迎える頃には、この律法主義的傾向はパリサイ人によって代表される。^{注1}そして、この律法主義こそが、主イエス・キリストを十字架につけた元凶である。また同時に、その粉碎のために、十字架を必要とするほどの、人間の罪の「最後の砦」となったのである。

3. 歴史書(2)の神の民の再建事業は失敗

(1) 終着駅は律法主義

◆律法主義とは、人間のわざが強調されて、そのわざに対する報酬として神が良いことをしてくれる、という確信的な期待と考えてよい。そこには、人間が罪人であるという事実が忘れられ、贖罪において示される神の愛と恵みが過小に評価される危険が多分にある。この律法主義は捕囚期前にも潜在していたが、亡国と捕囚はいわばその破産を明らかにしたようなものだった。

◆帰還と再建が許されたということは、何よりも<罪のゆるし>という一方的恩寵による。そこに神の愛を見るべきであった。しかし、再建が<わざ>としての誇りの材料になるとき、律法主義はたくましくよみがえる。

◆捕囚以前にもおいても、律法はイスラエルにおいて尊重されていた。しかし、捕囚期に神殿を失ってシナゴグが登場するようになると、律法の比重は増大していく。帰還後に神殿ができてからも会堂(シナゴグ)の役割はますます大きくなり、そこで律法が読まれ、教えられ、こうして律法はイスラエルの精神生活の中心を占めるものになっていく。また、それを教え、指導する

注1 ルカの福音書18章9～14節参照。

レビ人の役割も大きくなっていった。

◆エズラによる律法公布という出来事が、この動きにおいて重要な地位をしめることは確かである。しかし**律法の絶対化に伴い**、アブラハムやモーセやダビデに代表されるようなイスラエルの信仰が、微妙に変質していき、徹底的な律法中心宗教としてのユダヤ教へと変貌していくのは、エズラよりも後の時代である。マラキ時代のような民のふてくされた姿はそう長くは続かなかった。ユダヤ人の律法への熱心は、一見それを克服したかに見えた。しかし、**前者一ふてくされー**が主とマラキの心を痛めたのに劣らず、**後者一律法に対する熱心さ、実は律法主義ー**も神の心を痛めたのである。

(2) キリスト・イエスに対する信仰による義を指向する

◆このように、結局、旧約の歴史が全体として告げるところは、神の選民イスラエルでさえ失敗したという事実を通して、人間の罪の深さが証明され、救い主が来られる以外に希望はないということが明らかにされている。

◆使徒パウロは、ガラテヤ書でこう述べている。

「信仰が現われる以前には、私たちは律法の監督の下に置かれ、閉じ込められていましたが、それは、やがて示される信仰が得られるためでした。こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係りとなりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」(3章23、24節)

4. 律法主義への傾斜と畏・・律法によっては神の民は再建されない

(1) あなたの信仰生活は、律法による信仰生活か、それとも恵みによる信仰生活か?

◆今日のクリスチャンが、必ずしも、恵みによる信仰生活ー恵みの支配の中を歩み、恵みによって生きるーをしているとは限らない。

①ルカの福音書18章 9～14節・・義と認められたのはだれか

②ルカの福音書10章38～42節・・イエスはここでなぜマルタに「マリヤは良い方を選んだ」と言われたのか。

(2) クリスチャンと律法との関係

◆使徒パウロは「確かに、今は恵みの時、救いの日」(Ⅱコリント第二6章2節)と宣言する。それは、「・・あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にある」(ローマ6章14節)からである。「律法の下にはない」という意味は、「律法に対して死んだ」ということである。律法が死んだ、なくなったのではなく、私たちが律法に対して死んだのである。どのようにしてかというならば、イエス・キリストと共に十字架上で死んだのである。クリスチャンは律法に対して終止符が打たれており、「律法から解放された」ということである。それは、私たちがキリストとしっかりと結ばれ、御霊の助けによって、多くの実を結ぶようになるためである。・・これが恵みであり、それが今、実現しているのである。(ローマ7章4節、6節、Ⅱコリント3章6節、参照)

◆したがって、**新約聖書の強調点は、私たちクリスチャンが「キリストのために生きるのではなく、キリストと共にある(キリストにとどまる)ということである。**

「キリストのために」と「キリストにある」とは、全く異なる生き方をもたらす。「キリストのために」生きるということは、主が求めておられる、と思われることを行うことである。そのためには、聖書を読み、みこころにかなった生き方の原則を見つける。そしてその原則に従うように努力する。そのような生活をするならば、神が祝福して下さると信じる。しかし、これこそが完璧な律法主義的クリスチャンのライフスタイルなのである。というのは、神の祝福を手に入れるために、行いによって信仰の成長をはかるからである。神の恵みによってではなく、律法に支配されている人生となる。神が子買っておられることは、神のために、あるいはキリストのため

に何かをすることではなく、キリストと共にあること、キリストのうちに、キリストのことばに、キリストの愛の中にとどまることである(ヨハネ15章4～5節、7節、9節)。

◆聖書の原則に従って生きることは、一見良いことのように見える。しかしこれは巧妙な律法主義なのである。確かに、新約聖書には、私たちがどのように生きるべきかについての教えが書かれている。しかしそれらは従うべき宗教的規則ではなく、主が私たちを通して現わされる様々な形なのである。信仰生活とは、私たちを通して、神ご自身が現わされることである。このために、今は、キリストが私たちのうちに住まれ、御霊の助けが備えられている。

5. 神の恵みによる再建事業の待望・・・今なお、続いている

◆律法主義的信仰生活と恵みによる信仰生活とは共存することはできない。信仰生活において律法主義の人は、恵みによる信仰生活に入ることは難しい。恵みによる信仰生活つまり、キリストが私を通して現われる生き方一をするためには、律法主義的信仰生活を捨て去らなければならない。しかしそれは、私たちが長い間にわたって築いてきたライフスタイルのパラダイムシフトを求められることとなり、内なる抵抗が起こってくるのである。

◆私たちはキリスト教的な価値観、あるいは宗教的に規則に導かれているのではなく、主イエス・キリストご自身に召し出されている。主は「わたしのところに来なさい。」(マタイ11章28節)と招かれ、さらに「わたしにとどまりなさい」(ヨハネ15章4節)と招いておられる。なぜなら、私たちは「キリストを離れては何もすることができない」からである(ヨハネ15章5節)。

◆いのちの源は律法ではなく、キリストご自身である。また、キリストは神のみこころそのものである。この方によって、私たちは全く新しくされ、再建されるのである。

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。

古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(IIコリント5章17節)

◆キリストのうちにあること、キリストにとどまること、全てはそこから始まる。キリストが御父のうちにあり、御父にとどまったと同じように。そうすることによって、御父が御子を通してご自身を現わされたように、キリストが私を通して現わされる。これが歴代誌の指向するダビデの幕屋礼拝の本質であり、エズラ、ネヘミヤ記が願った神の再建事業なのである。そしてこの再建事業は、今もなお続いている。ここにキリスト教会の今日的課題がある。しかもそれは、私たちによってではなく、主キリストのよってのみ実現されるのである。

「祝福の源である御父と御子、御霊があがめられますように!

(完)

[参考文献]

- 千代崎 秀雄著「主の前に立つ」(一粒社、1990)
- スティーブ・マクベイ著「恵みの歩み」(尾山謙仁訳、ファミリーネットワーク、2000)
- スティーブ・マクベイ著「恵みの支配」(尾山謙仁訳、ファミリーネットワーク、2001)
- スティーブ・マクベイ著「恵みの地」(尾山謙仁訳、ファミリーネットワーク、2003)